

西暦1314年前後大元ウルス 西境をめぐる小札記

杉山正明

はじめに

本稿は、西暦1314年前後に天山北麓一帯で起きた元軍と Čayatai-ulus 軍との武力衝突に関連して、最も詳細な経緯を伝える同時代ペルシア語年代記『オルジェイト史』*Ta'riḥ-i Padšāh-i Sa'īd Ġiyās al-Dunyā va al-Dīn Ūljāitū Šultān Muḥammad*のうち、両軍の陣容・配置を詳述する箇所を原写本にもとづいて校訂・翻訳して紹介し、そこに列挙される人名・地名についてペルシア文と漢文を二大史料群とする13・14世紀モンゴル支配時代関連の本源諸史料より関係記事を捜求して歴史・文献上の同定を試み、14世紀初頭の大元ウルス西境に関する従来の理解に対して、ささやかな修正案を提示する。

アム河南北における Hülegü-ulus 軍との攻防とあわせ、Esen-buqa 当主時代(1310-1318)の Čayatai-ulus 東西両面での軍事紛争については、すでに C.M.D'Ohs-son, J. von Hammer-Purgstall, A. Vámbéry, E.E. Oliver, В.В.Бартольд, R. Grousset, G. Spuler, 植村清二らが言及し、最近では再び加藤和秀, T. Allsen が触れ、1986年秋、南京開催の元史国際討論会では劉迎勝が特に対元戦に絞って漢文史料も利用して事件経過を概述した¹⁾。にもかかわらずあえてまた検討しようとするのは、ひとつには上記先業は未刊の劉を除きいずれも経過を簡単に記すか、論述の都合上述べるにとどまり、ただ Бартольд だけが若干の鍵となる地名に留意した跡が窺えるほかは、一言一句の文献検討に深入りしなかった結果、類似記事のない具体状況の解明・把握が従来逸せられたままになっているためであり、いまひとつには、以下の理由で不十分であった筆者のふたつの前稿を補うためでもある。

1) 口頭報告の限りでは、1310年代から1320年代の Altai 以西方面の総述である。従って、通史上の位置付けは近い将来に公刊されるであろう劉論文に期待し、本稿は文献検討を主力とする。

同書当該箇処には、筆者がさきに言及した Čayatai 系 Čübei 家に関連する見逃せない記事があり、前二稿ではそれに気付きながらも、原写本を参覧できない条件下で、特に人名・地名等の読字・校訂に強い疑問を感じさせる既存の Hamblī 刊本 (*Ta'rih-i Ūlġaitū*, ed. Mahīn Hamblī, Tehran, 1969) だけに依拠する不安から、ことさらに言及を廻避した。『オルジェイト史』には、A.H.752年 Rabr' II 月末日(25, VI, 1351 A.D.)の奥附のある Istanbul の Aya Sofya 図書館所蔵本 (MS 3019/3, folio 135-240) と19世紀頃における Ch. Schefer 旧蔵の Bibliothèque Nationale 所蔵本 (MS Supplément persan 1419, 164 folios)²⁾のふたつの写本だけがいまのところ知られている。『オルジェイト史』自体は、同書のなかに見える最も晚い年次が718/1318-19年 (S 205b/13, P 108a/17) であることから、Ölġeitū (治世703-716/1304-16) の弟で後継者の Abū Sa'īd 当主時代 (716-736/1316-1335) 初期頃の著作と考えられており、従って S 本は著作よりさほど年を経ない極く早い時期の古写本といえ、校訂の底本とするにふさわしい。P 本は S 本よりの直接の筆写とするにはなお検討の余地を残すが³⁾、読み取りにくい S 本の綴字を確定する上で役に立つ。いま幸いにして両写本を利用する便宜を得、加えて Hamblī 刊本に先立つ一年前に同じ Tehran 出身の M. Parvisi の手になる同書全文への校訂・独訳・附注・解題が西独 Göttingen 大学へ博士論文として提出されていたことを知った (Maryam Parvisi-Berger, *Die Chronik des Qašānī über den Ilchan Ölgäitū (1304-1316)*, *Edition und kommentierte Übersetzung*, Dissertation zur Erlangung des

2) F. Tauer, Les manuscrits persans de bibliothèques de Stamboul, *AO*, 3-3, Prague, 1931, 473, no. 382. В.В.Бартольд, Записки Восточнаго Отделения Императорскаго Русскаго Археологическаго Общества, 18, 1907-08, 0119-0123. E. Blochet, *Catalogue des manuscrits persan de la Bibliothèque Nationale*, I, Paris 1905, 283, no. 450. do., *Bibliothèque Nationale, Catalogue de la collection des manuscrits orientaux, arabe, persans et turc, formé par M. Ch. Schefer, publié par Blochet*, Paris 1900, 95, fn. 1419. K. Jahn, Study on Supplementary Sources for the Mongol History of Iran, *Aspects of Altaic Civilization*, edited by D. Sinor, the Hague 1963. なお Bibliothèque Nationale の Blochet 作成 Catalogue は不十分で長く不評であったが、現在、同館員で *Iranist* の F. Richard により新版が作成中であり、その第1巻は近々公刊とのことである。

3) Parvisi は直接の筆写と副次依存のふたつの可能性を並記する [Par. Einleitung, 5]。筆者は現在結論に達していない。

Doktorgrades der Philosophischen Fakultät der Georg-August-Universität zu Göttingen, Göttingen, 1968) ⁴⁾。内容を検討してみると、手書による校訂は Hamblr 刊本を上回り、独訳も草稿かと思わせる未消化で文意の通りにくい『オルジェイト史』に対して、意図して原文に密着せず、その当否は別として、簡明を旨とした苦心の意識となっている。イラン文献学からの言及を特徴とする長文の解題と422条の注記も利点が多い。有用さは疑いない。しかし反面、頻出する固有名詞や特殊用語、とりわけトルコ・モンゴル語彙に関しては、Hamblr 刊本と共通する面を否定できない。S 本は同時期のペルシア語古写本と同様に、各単語の上・下の点あまり嚴重に附されず、rasm (上・下の点を取り去った字形) でしか綴られないこともしばしばある。Arabo-Persian の単語はともかく、Turco-Mongolian 或いは漢語起源等の単語の場合、読字ないし翻字自体がまず容易に決めがたい上に、しかもおおむねそれらの単語こそ、当然のことながら歴史状況と深刻・密接にかかわる人名・地名・部族名などの key word であり、その一語一語が他の膨大な同時代諸語文献との厳密かつ慎重な照合・同定作業を要する。十全な歴史状況の把握なしには、満足しうる校訂・翻訳もまたなしがたい。ペルシア語文献というものの、モンゴル人王廷の記録であり、東方 Čayatai-ulus や大元ウルス関係の記事も異例なほど豊富に含む『オルジェイト史』の校訂・訳注に関して、二人のイラン人女性が残した課題の解決はモンゴル帝国歴史研究の側にゆだねられているといつてよい。本稿がそうした同書利用の事例研究の意味をもちえれば幸いである。

I

【イスタンブル写本を底本とした校訂案】

S f. 223a, ll. 5-25 ; P f. 131b, ll. 16-132a, l. 19. S 本に G は存在せず、P・Č も稀に見えるのみで、K・B・J が使われる。JTS に顕著な D の Ā 表記等は見られず、語末の Y がしばしば Ÿ と表記される程度である。校訂はペルシア語として K・B・J のままではいかにも不自然な Arabo-Persian の単語や明らかに G・P・Č と読んだに違いない Turco-Mongolian の単語等は変えたが、固有名詞等はそのままにした。翻字では S 本のまま示すことを原則とし、rasm の場合は筆者が想定する字をイタリックで示した。なお以下、本稿で蒙古語として転写形を示す場合、文語形式の慣例に従った。

4) 小野浩からこの存在と所在を教示された。謝意を表す。

5 5

- 6 دیگر انک لشکرگاه قان بجیرکا بر سرحدّ ثغور مسلسل و مرتبط چون
7 انگشتان پهلوی به پهلوی نشسته اند و سپاه ایسنیوقا روی با روی موازی
8 ومحاذی ایشان بیورت دارند و اول برابر ایسنیوقا و ابوکان پسر دوا در بیورت
9 او کوهوی از چریک قان طوغاجی جینسانک پسر بوقا وینشآء با دوازده
10 تومان چریک بیورت و مقام دارد که بایلامیشی او بجانب بیسون مورانست
11 و قشلامیشی بمرحله قوباق و متعاقب او جونقور وانک پسر شوتغاق بهادر
12 از استوان قبجاق که نوکر بایان جینسانک بزرگ بود بفتح دیار و بلاد
13 منزی و ننکیاس در جنب او با پنج تومان بیورت قونقولتو و الاییتاق نشسته
14 و برابر او شتره اوغول پسر جکتو و نوکرش قوتوقو بهادر با چریک خود در مقابل
15 او ست و فرود ایشان پسران جویای نمغولی و بیانتاش و کونجاک پسر قبان
16 با دوازده تومان در بیورت سیکجو تا کامل و ولایات ایغورستان مقیمند
17 و مواجهه ایشان ایمل خواجه برادر ایسنیوقا پسر دوا با دو تومان ساکنست
18 اینها مقدمه و منقلای جانب غربی و جنوبی لشکر قان اند و اگر نه از جانب
19 مشرق و شمال و حدود دیار ختای و ننکیاس در جنب یکدیگر متعاقب نشسته اند
20 چون انگشتان دوش بدوش و چون دندانهاء شانه پهلوی پهلوی مثلا در بارس
21 کول بلارغی پسر کیوکچی مینکفانک با عساکر متکائر بیورت و مخیم دارد برابر
22 او قوتوقو نشسته و در کامل پسر قبان با سپاهی بزرگ مقیم و مقابل او
23 سبنان زیرک و احمد امیر تومان مواجهه نشسته و در دیار توبوت جاتای
24 پسر مغولطای دووین شاه ساکن و مقابله او جانجول بخشی با امیری هزاره
25 مقیم

【逐語試訳】

一方、Qanの陣營は *jerge* となり指々が並び合うように境界上に連なり続いて駐し、Esen-buqaの軍士はそれに面と面を向かい対して幕營地を有した。まず、Esen-buqaとKuk-hurというその幕營地にいるDu'aの子Ebügenに対して、Qan軍のうちBuqa元帥の子Toyači丞相が12万人隊の軍とともに幕營・屯住地を有する。その夏營はYisün-mören方面に、冬營はQobuyの宿場にある。それに続いて、その傍にManziとNankryāsの諸地域の征服においてBayan大丞相の *nökör* であったQipčaq族のTutgāq-bahādurの子Jünqur王が5万人隊とともにQunqultuとĀlayī-taqの幕營地に駐した。それに対してČečegtüの子Šatra-uğulとその *nökör* であるQutuqu-bahādurが自軍とともに彼に正対する。それらの下方には、Čübeiの諸子Nom-qulrとBuyan-dašおよびQabanの子Könčegが12万人隊とともにSügčüの幕營地からUigüristan諸地方に住し、彼らの面前にはDu'aの子にてEsen-buqaの兄弟Emil-hvājaが2万人隊とともに居る。これらはQan軍の西・南面の前衛 (*manglai*) であり、他方、東・北面およびHitarとNankryāsの疆域についても、指々が肩を並べるように、また櫛の歯が並び合うように互いの傍に続いて駐した。例えば、Bars-kölにはGüyügči Mingyanの子Bularyiが増

援諸軍とともに幕営・帳幕地を有し、それに対して Qutuqu が駐した。Qamul には Qaban の息子が大軍とともに住し、それに正対して Sabgān-zītrak と Aḥmad 万人隊長が面前に駐した。Tabut の諸地方には Muḡūlṭai 都元帥の子 Jatai が居り、その正対に Jankjul-baḡṣṭi が一人の千人隊長とともに住する。

【語注】

6 QAN/Qan モンゴル時代およびそれ以後のペルシア語文献では ḥan と明確に区別され、Ögödei, Möngke および Qubilai 以下の元帝のみに使用され、モンゴル皇帝を意味する。特に、元帝を示す場合、しばしば固有名詞を冠せず、QAN とのみ書く。ここでは第 8 代皇帝の仁宗 Ayurbarwada を指す。S 本ではただ一箇処 [237a/11, P 153a/1] QAĀN とするのを除き、他処はすべて QAN。M.E. Quatremère, И.Н.Березин, E. Blochet 等の早期の『集史』諸刊本で QAĀN の形が採られ周知となっているが、手許の写本を見ると、1433年書写 L 本、16世紀書写とされる P 本、最古の収蔵日付が 1620年の Tm 本では QAĀN であるものの、1317年書写 S 本は QAN, 14世紀書写 La 本では QĀN。A.A.Ализаде は S 本を見ながらも一貫して QAĀN を採り、ほぼ同じ条件の K. Jahn のみ QĀN とする。『集史』と近いと思われる『五族譜』*Šū'ab-i Panjgāna*⁶⁾ で主に QĀN でありながら、同書をおそらく主な典拠として A.H.830/1426-27 A.D. に Ḥafiz-i Abrū が編纂し、後人が追加した『高貴系譜』*Mu'izz al-Ansāb* では QAĀN とあることから、モンゴル時代14世紀には通常 QAN ないしは QĀN と書かれていたものが、ティムール朝治下で QAĀN と改められた可能性がある。QAĀN の綴りは、ウイグル文字表記の *qayan*, パスバ字の *qa'an*, 『元朝秘史』の^中合罕 *qahan*, ^中合阿納 *qa'an-a* (locative) 等との対応を連想させる。『世界征服者史』*Ta'rih-i Jahān-Guṣā* の最古写本 Bibliothèque Nationale 所蔵 Supplément Persan 205 (A.H. 689, Zu'l-Hijja, 4 / 8, XII, 1290 A.D. の日附あり) では QAĀN と綴られるから (*Qazvīnī* I 附載 f.174b の写真 8 行目), ティムール朝の史官がウイグル文字ないし蒙古語を意識し Juvainī の綴字を復活・固定させたことも考えられ、今後一層の諸写本蒐集により見定めたい⁶⁾。

JYRKA / *jirgā* > m. *jerge* 「狩りの布陣」, 「列状の布陣」。Doerfer は「勢子の輪。軍事; 敵軍包囲のための円形あるいは半円形の布陣。序列」の語義を与え [Doerfer I : 477-480], Parvisi は Kreisförmiger Anordnung 「円形配置」と訳す。ただここでは全元軍が(半)円形の包囲陣を布いたと解するのは無理である。『秘史』では、者^𐰽兒格連 *jerghelen* 列, 者^𐰽兒格迭扯 *jerge-deče* 班列裏, 者^𐰽兒格額^𐰽兒 *jerge'er* 依次, 者^𐰽兒格突^𐰽兒 *jerge-tür* 列位裏, 者^𐰽兒格額^𐰽兒 *jerge'er* 列着, 者^𐰽兒格突^𐰽兒者^𐰽兒格連 *jerge-tür jerghelen*

- 5) Topkapı-Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, Ahmet 2937. 全227葉。太古よりモンゴル時代に至るユダヤ、ムスリム・アラブ、モンゴル、フランク、チーン種の五種族の歴代諸王統を図示したペルシア語系譜集。アストラハン王 Qasim Sulṭān 旧蔵写本で、発見者 A.Z.V. Togan によれば、15世紀にマー・ワラー・アンナフルで筆写された。特にモンゴルの部分 (96a-148a) は、Dübün Bayān から Ğazān-ḥan までのモンゴル王族男女計1,129人 (名が未記入の37人も数えた数字) が挙がり、Činggis-qan の先祖と後裔の名・系統に関する根本史料となる。多くの人名は、各枠内 (男は矩形、女は円形) の上半に朱書によるウィグル文字、下半に墨書によるアラビア文字の二種で綴られる。各ウルス歴代首長は金字によるアラビア文字だけである。また Güyüg を除く Činggis 以降の各 Qān と Joči・Čayatai・Tolui・Ariy-böke および Hülegü 以降の各 Hülegü-ulus 首長には、詳細な后妃・将臣一覧表が附く。Togan は本書が不明の『集史』第三巻の一部を構成すると考えたが、内容上、『集史』、とりわけ各 dastan のはじめに附された系図との密接な関係は疑いないものの (1317年書写の最古・最良の JTS との比較。JTLa 以降では附系図が未記入の場合が多く、改字・改文・誤字・誤入も次第に強くなる)、例えば Qaišan に成書当時の Qān と傍注されたり、個々の人名にも明らかに1310年以降に置かざるをえないものもあるなど、Togan 説には慎重にならざるをえない。内容上、特に目につくのは Güyüg を Qān に立てず、Ögödei (彼自身も Qān ではなく ḥan と書かれる) 諸裔の系一として処遇する一方、Ariy-böke を Temür のあとに歴代 Qān と同格で立項していることである (Mu'izz も踏襲する)。「集史」も Qubilai 紀第三章を Ariy-böke 伝にあて、特別の配慮を示しているが、モンゴル帝国史全体の構想にもかかわる問題であり、また本書ないし本写本成立の由来を考える上でも注意すべき点であろう。その他、個々の簡処には徹底究明すべき点もかなり認められる。とはいえ人名の綴字は極めて明瞭であり、体裁上、近似する *Mu'izz al-Ansāb* P 本ではすでに崩れた場合の多い人名を『秘史』や漢文表記等と比較しつつモンゴル帝国史の基礎資料として確定していく上にも役に立つ。モンゴルの部分だけでなく他の四部分も『集史』諸国史の部分等と比較検討する必要があるだろう。本書はいわばモンゴルの世界支配の理念と情報を図化したものといえ、内容の検討・利用・普及を図るのはもとよりながら、徹底した文献解析を行ない、その性格・流伝を明らかにし、モンゴル帝国史の生きた証人としての本書の全貌を見極めたい。確実な文献紹介は他日を期す。A. Zeki Veldi Togan, The composition of the history of the Mongols by Rashīd al-Dīn, *CAJ*, 7, 1962, 68-71; Reşid-ud-Dīn Ṭabīb, *İslām Ansiklopedisi*, 9, 1964, 710; *Umumî türk tarihine giriş*, I, 1946, 258,370,381,453; *Tarihde usul*, 1950,58,211. Karl Jahn, The still missing works of Rashīd al Dīn, *CAJ*, 9, 1964, 116-119. 本田實信、『ラシード全著作目録』について、『西南アジア研究』23, 1984, 72-74。
- 6) 『集史』諸写本の利用には本田實信から多大の恩恵を受けた。厚く謝意を表する。

次序裏列着、者兒格列克先 *jergeleksen* 列了了的、者⁵兒格迭徹 *jerge-deče* 次序行 [1/11b, §19, 711; 3/12a, §108, 2712; 5/12a, §151, 4608; 5/24a, §155, 4816; 5/29b, §159, 4918; 8/46a, §208, 8112, 8113; 9/9 b, §213, 8324; 続1/32b, §255, 10512] と、共通して「列状」を示唆する。依次、次序裏、次序行と傍訳された三例も、Cleaves は “in [parallel] ranks” “in the row” “from the rank” [Cleaves 1982: 80, 149, 197] と訳し、その第1例について小沢重男は「《つぎつぎに》ではなく《一緒に平行して》」と注し「一連して」と訳す [小沢下: 218] ように、「列」を含意する。特に小沢が注意した例は、『集史』に「その後その年の冬を AWNĤAN 王汗は KLWRAN / Kelüren 方面より前に移動して QWBH-QYA / Quba-qaya への途上をいきつつ、他のものたちも彼の踵を追って移動し、JRKH / jerge となって行った」[JTS 80a/20-21] とあり、『聖武親征録』に「冬、汪可汗は兵を分かち、[自ら] 怯緑憐河より忽八海牙山を指して先発し、部衆は後に列を成して進む」[cf. Pelliot et Hambis: 419, n. 3] と全く同内容が載り、明白である。(半) 円形にこだわる必要はなく、むしろ本稿引用文全体が *jerge* の好例となろう。

8 ABWKAN / *Ābügan* > m. *Ebügen* 『集史』*Čayatai* 紀本文には見えず、附系図に Du'a 10子の8番目に APWKN と見える [JTS 171a]。Šu'ab 120a に同じく8番目に ABWKAN, 'BWK'N。Mu'izz P 32b に14番目 AWBWKAN。のちの *Čayatai-ulus* 当主 Ĵingši (1334-38), Yisün-temür (1338-39) の父。〈世績碑〉に「(延祐)二年(1315), 也先不花の將, 也不干・忽都帖木兒と赤麥干の地に戦う」とある也不干 *Ebügen* か。

9 KWKHWY / Ham. AWKWKHWY, Par. 'WKWKHWY / *Kük-hür* > m. *Kög-hoi?* Hamblī と Parvisi はともに前の AW / ū と一語と見るが、本処記事のやや後に「(Esen-buqa は) 自分と同腹の兄弟でもある ABWKAN / *Ebügen* と KBK / *Kebeg* を強力に血に餓えた1万人隊の軍とともに KWKHWY の方面に派遣した」[S225b/8-9, P135b/11-12. Ham., Par. とともに KWLHWY と読む] とあり、*Kük-hür* なる地名である。*hür* を『秘史』の *hoi* 林と解せば、「青い森」。〈世績碑〉に「(大德)四年(1300)秋, 畔王秃麥 *Tögme*・斡魯思 *Oros* 等, 辺を犯す。王 (= 創兀兒 *Čong'ur*), 敵を濶客の地に迎う。其の未だ陣せざるに及んで, 王は其の軍を以て直ちに之を搏つ。敵, 支うる能わず。之を逐いて金山を踰えて乃ち還る」と見える濶客 *Kög-Köke* の地は, 屠寄のいう「今の賽音諾顔部中の左末旗右翼右後旗兩界に枯庫嶺あり。即ち此の濶客の地」[蒙兀兒史記102/5 a·b] かどうかは別として, 少なくとも金山 = Altai 以東に位置するので, *Esen-buqa* 陣營のうち *Kük-hür* だけが異常に東方に突出してしまうことになり, 不適

当。むしろ1375年はじめ、Sayram から Čarın に達したティムールの第三次モグーリスターン遠征軍に対して時のモグーリスターンの実権者 Qamal al-Dīn が自軍を集結させた KWK-TPH / *Kök-tepe* [Šamī : 69 / 10] ないし KWK-TWPH / *Kök-töpe* [Yazdī : 151b / 2, 207b / 7] の方が Ili 河東に位置することになり可能性がでてくる [Cf. Semirečnyé⁷⁾; 139-140]。

ᠲᠤᠪᠠᠵᠢ ᠵᠢᠨᠰᠠᠨᠭ / *ᠲᠦᠭᠠᠵᠢ ᠵᠢᠨᠰᠠᠨᠭ* > *Toyači-čin(g)sang* 本書では704 / 1304-05年の初出 [S 152a / 16, P 26b / 5-6] を皮切りに頻出する。植村は「チンサンは丞相である。元史宰相表には見当たらないが、仁宗即位の際、中書右丞相知枢密院事に任ぜられた脱火赤抜都児こそ、恐らくその人に相違あるまい。彼は一三一五年（延祐二年）に威寧郡王に封ぜられて、金印を賜はってゐるが、それは恐らくイセンブカ追討の功によるものであろう。しかし延祐四・五年の交には、彼はまた叛したことが元史本紀に見えてゐる。その事情は一切不明である」[植村 3 : 66] と簡潔に述べ、佐口透も D'Ohsson への訳注にて「元朝史料の丞相知枢密院事脱火赤抜都児をさすか」[帝国史 6 : 236, 注 1] とする。両氏がいう(A)『元史』24, 至大 4 (1311)年 3月記事中の「中書右丞相知枢密院事」は中書右丞相だけに訂正する必要があるが（知枢密院事はつづく鉄木児不花 *Temür-buqa* の冠称）、この記事を最初に本紀には(B)同25, 延祐 2 (1315)年 10月「丁丑、脱火赤を封じて威寧郡王と為し金印を賜う」、(C)同26, 延祐 4 (1317)年 2月「丙寅、諸王の部、脱火赤の乱に値い、百姓貧乏なるを以て鈔十六万六千錠・米万石を給してこれを賑わす」、(D)同年 6月壬子「安遠王醜漢*Čuqan・趙王阿魯禿 *Aruytu*、叛王脱火赤の掠むる所と為る。各おの金銀・幣帛を賜う」、(E)同年 7月庚辰「叛王を討ちて功有る句容郡王床兀児 *Čong'ur* 等に金銀・幣帛・鈔を賞すること各おの差有り」、(F)延祐 5 (1318)年 2月庚申「叛王脱火赤を討ちたる戦功を賞し、諸王の部の察罕 *Čaqan*~*Čayan* 等に金銀・幣・鈔を賜うこと差有り」と見え、(G)劉敏中〈趙王先德加封碑〉『中菴集』元刻本 4 「(至大)三(1310)年…趙王(朮安 *Ju'an*)一日、王傅脱斡 *Toyan*・司馬阿昔思を召して謂いて曰く、『先王(闊里吉思 *Körgis*<*Georges*)、卜羅 *Bolad* に旅殯す。…五月、戍辺の淇陽王月赤察児 *Öcičer*・丞相脱禾出八都魯を過ぎる。卒五百人を仮りて其の行を衛らしむ。七月、殯所に達す」(元史118阿剌兀思剔吉忽里伝_m闊里吉思伝にもほぼ同文) (H)〈勅賜康里氏先塋碑〉『黄金華先生文集』28統彙 5 に武宗 *Qaišan* 時代の至大三(1310)年頃のこととして「辺將脱火赤、新軍[万人]を以て宗王丑漢*Čuqan に益さんことを請う。

7) 同書の利用には、V.T. Minorsky によるすぐれた英訳を活用した。

廷議して王(=康里脱脱 *Qangli Toyto*)を俾て往きて其の資装を給せしめんとす。王、言えらく『時、方に寧謐たり。宜しく挑変して事を生ぜしむるべからず』と。辞して行かず。遂に丞相秃忽魯 *Tuyluq* 等二人を遣わして往きてこれに給せしめ、幾んど以て変を激す(元史138康里脱脱伝にほぼ同文。[]内はそれに拠る)とあるほか、『站赤』には本処記事と直接関係する駅伝敷設記事中に元北面の最突端地区の守将として、同5皇慶元(1312)年11月18日「脱火赤の地」、同二(1313)年10月14日「脱火赤八秃児・寛徹(後掲の Čubei の姪 Kōnčeg。西面突端の将)の地」「迤北の脱火赤の脱脱禾孫 *tođqasun*」、同月23日「脱火赤・寛徹の地」と見える。同書6延祐元(1314)年3月15日の「宝児赤 *bayurči* の脱火赤」は別人か。管見の限り、彼の出自にかかわる情報は本処記事のほか見ない。(C)(D)(E)(F)による1317~18年の叛王脱火赤が植村がいうように本処の *Toyači* と同一人である可能性は、(D)の安遠王醜漢は(H)の宗王丑漢に当たるので、極めて濃いといえる。本書での初出は704/1304-05年の Du'a との協同作戦による Čabar 追い落とし(後述45頁)なので、*Toyači* は *Qaišan* 即位以前の Altai 進駐軍の一人として成宗 Temür 時代から同方面にあったことになる。仁宗即位にあたって *Toyači* と後掲の Čongyur という旧 *Qaišan* 麾下の二人の北面辺将がともに右丞相を遙授していること(A)は、かつて握りかけていた帝位を兄 *Qaišan* 軍団の進撃に屈して一旦は譲らざるをえず、*Qaišan* 治世4年間でも皇太子に指名されながらも隠微な暗闘がつづいた Ayurbarwada にとって、明らかに *Qaišan* 系列と見られるこの二人を懐柔する意味があったのだろう。本処記事の14年後には Čongyur の第三子 El-temür⁸⁾ が *Qaišan* の次子 *Tuytemür* を擁して泰定帝 *Yisün-temür* 系の政府を打倒する(天曆の内乱)。本処の *Toyači* と叛王脱火赤とが同一であるならば、その叛乱は本処記事の2年後、延祐3(1316)年におきた *Qaišan* の長子 *Qošila* の Altai 地区ないし Čayatai-ulus への逃入と無縁ではない可能性がでてくる。その場合、本処記事の二人の北面辺将 *Toyači* と Čong'ur は割れ(E)、*Qošila* に附いた *Toyači* は史料の上からは姿を消す結果となったことになる。

BWQA WYNŠĀy / m. *Buqa Ōnšai* Parvisi は Boga WNYŠA とするが、二語目の綴字前半はウィグル文字蒙古文で WYN と表記する「元」に相当し [Cf. Cleaves 1951 : 53, l. 1], 「元帥」の正確な転写。『集史』では, WNKŠY [S206b/17], WAN-

8) El-temür は15歳より10年あまりモンゴリア出軍中の *Qaišan* の *kešig* < *kāzik* に侍し、仁宗時代はじめには周王とされた *Qošila* の「常侍」に任じられている [〈勅賜太師秦王佐命元勳之碑〉馬石田文集, 明刻本14/3b, 元史138 燕鉄木兒伝]。

ŠY [130b/8, 10], WANKŠAY [98b/11, 12, 13. なお l. 11の WAYKŠAY の最初の Y は N の誤記], JWNKŠY [95b/22], YWNKŠY [96a/21], YWNKŠAY [97a/5] と、六箇処に六様の綴字が見られ、かつ初例に「万人隊 *tūmān* > *tūmen* のアミールを… (という)」、第 2・3・4 例に「…の意味は万人隊のアミールである」、第 5 例に「即ち全軍のアミールである」、第 6 例に「その意味は *Hitai* の言語で万人隊のアミールである」と語釈が付く。Doerfer [Doerfer IV : 42, 229-230] は WANGŠAY と YWNGŠAY の両項目を掲げるが、当該箇処に必ずしも良質の『集史』刊本が存在するとは限らないため例示した変異形の綴字が十分でなく、かつ第 4 例を落とす [Cf. Pelliot 1930 : 42-44, 43 n. 1]。第 1 例について、Rašīd の語釈から着想して Blochet [Blochet : App. 46], Yule [Yule III : 120 n. 1] は *wang* = 万 *wàn* を想定したが、Pelliot [Polo II : 858] が峻拒するとおり。漢文史料では、例えば『元史』13, 至元 21 (1284) 年 6 月「庚申、蒙古都元帥府を改めて蒙古都万户府と為し、砲手元帥府を改めて砲手万户府と為し、砲手都元帥府を回回砲手軍匠万户府と為す」や、また個別の具体事例でも同一の軍団内に正三品_中の武散官である昭勇大將軍 (典章 7, 吏部 1, <資品> 一覧表の武散官正三品には乱れがあり、元史 91, 百官 7 に従う)⁹⁾ の位階をもつ都万户と、正三品_下の昭毅大將軍をもつ副都万户とが並立する場合がしばしば確認され¹⁰⁾、両職を『元典章』7, 吏部 1, <内外文武職品> 一覧表で捜すと、正三品軍職の項にはその職名が見えず、代わって元帥と副元帥が挙がる。元帥が実際上で万户長であり、とりわけ都万户と名称上も互用され

9) 元の階官の名称は金制をそのまま引き継ぐ。

10) 例えば、*Ĵalair* と *Hüġušin* 両族の将帥を戴く二頭立の軍団である「河南淮北蒙古軍都万户府」の場合、二頭立て構成であることを撰文の骨子とする李朮魯拙〈河南淮北蒙古軍都万户府増修公廨碑銘〉 [中州名賢文表 30 / 2 b-4 a. 菊潭集 (藕香零拾所収) 3 / 42a-43a は前者からの引用] では、撰文時点の都万户が *Ĵalair* の察罕鉄穆爾 *Čayan-temür* で昭勇 (正三品_中)、副都万户が *Hüġušin* の昔置 (里 or 禮) 伯吉で昭毅 (正三品_下) と対句風に並置大書される。後者は自らが山西聞喜の本拠に立碑した〈遷修洞霞觀記〉〈忽神公神道碑〉 [ともに山右石刻叢編] の末尾で息子八撒兒 *Basar* とともに全肩書を刻石したが、彼自身は副都万户で息子は万户であった。「河南淮北軍団」4 万户のうち、2 つの万户はこの父子がそれぞれ長であったわけである。このことから都万户・副都万户は自身が万户長であり、かつ複数の万户を束ねた軍団の長・次でもあったことになる。なお、この軍団の概略は松田孝一、河南淮北蒙古軍都万户府考、『東洋学報』68-3・4, 1987, 37-65。

ることがわかり、Rašīd 語釈が事実であることを裏附ける。ただしいま Buqa 元帥を特定できない。当代東西文献に同名の人物はおびただしく、逆に特定するにはいずれも材料不足である。例えば『ヴァッサーフ史』に BWQA BWŠA なる人物が見え [Hammer-Purgstall¹ : edition 12/20, übersetzung 25, Vaṣṣāf : 20], 劉がすでに述べたように BWŠA は TWŠA の誤記で Buqa 太師の意である可能性が高いが [劉1984 : 31, 35n. 9. なお TWŠA / tūšā > t'ai-shih については Buell : 122-124, Serruys : 372-374 を見よ], 本処の Buqa 元帥と同一であるかどうか関連づける記録を見出せない。

10YYSWN MWRAN / Ham. YYSTWN MWRAN, Par. BYSWN-Mūran (B は rasm のみの意) / m. Yisün-mören 九河の意。『元史』120, 朮赤台伝に至元13・4 (1275・6) 年以後の Širegi 等の叛乱に関連して「又た嘗て失烈吉 Širegi・要木忽兒 Yobuqur を野孫漠連に破る」と見える野孫漠連 Yesün-mören か。Бартольд は Esen-müren と読み, Irtiš の支流とし [Semirechyé : 133], 後人の言及すべてそれに従うが, 明らかに W が読み取れ, Esen とするのは無理である。

11QWBAQ / Ham. FWTAQ, Par. QWNAQ / Qubāq > Qobuq Бартольд は「冬營地は Qobuq の岸边にあった」 [Semirechyé : 133] とこの地名を正しく把握し, Allsen は明らかにそれに拠って Hamblt を Khobakh と訂正する [Allsen : 259, 277n. 116]。同地は Juvainī によって Emil とともに即位前の Ögödei の yurt とされ [Qazvīnī I : 31, Boyle¹ I : 43, 43 n.14, 184], その登臨後は同じく Emil とともに庶長子 Güyüg の ordo の所在地とされ [Qazvīnī I : 217, Boyle¹ I : 262], さらに〈耶律公(希亮)神道碑〉『危太樸集』(劉氏嘉業堂刻本)続集2でも「火亭」は「定宗潛邸湯沐の邑」の葉密里 Emil 城とともに「定宗の幼子の大名王」(大名は Güyüg 家の華北投下領)たる「宗王火忽」(Hoqu. Šu'ab 124b : HWQW, 'WQW) の所領と書かれる(元史180耶律希亮伝にはば同文)など, Ögödei-ulus の中心地であった。後世ジューン・ガル時代にも主要な牧地となり, 清軍によるジューン・ガル殲滅後は Volga から帰ったトルグート親王一王家(北路右翼旗)の營地となり, 現在は和布克賽爾蒙古自治県として新疆維吾爾自治区におけるモンゴル人集住地区の一中心となっている¹¹⁾。

JWNQWR WANK / Ham. JWNQWR DANK, Par. Ğünqūrdang / Jünqūr-wāng > Ğongyur-wang 〈世績碑〉の創兀兒, 『元史』128土土哈伝の牀兀兒, 『元史』本紀等の床

11) 馬大正, 伊犁考古散記, 『伊犁河』1983-3。張承志, 関于阿力麻里・普刺・葉密立三城調査及探討, 翁独健紀念『中国民族史研究』北京, 中国社会科学出版社, 1987, 149-162。こうした有益な現地調査・報告が今後も続くことを期待する。

兀児。有名なQıpčaq軍団長。『集史』Qubilai紀に「Qubilai-qānの大アミールの一人であったTWQTAQの子JWNKQWR」と見え [S 208a/23・24], Temür紀にも西方辺將としてJWNKQWRの名が二度見える [S 217a/7, 14]。『集史』のNK/ngは漢文文献と一致し、さらに漢字表記からするとČong'urが指示されるだろう。WANKはP本ではDANKと明らかに綴り、Ham., Par.はそれに拠るが、S本では後出DWWYN-ŠĀyの例のようにWとDとは弁別しがたい。本事件に先立つQaišan時代の至大二(1309)年正月己亥に床兀児に与えられた「句容郡王」の王wangと見る [Cf. JTS 97a/2, 4ではLY-WANK遼王, 97b/26にはLY-ŠY-WANK遼西王などの例がある。Doerfer IV : 41-42]。

TWTĠAQ BHADR/Ham. TWTĠAQ BHADR, Par. TWNĠAQ Bahādor/Tūt-gāq-bahādur>Tudyqay-bayatur 前掲の父。彼の伝記は<世績碑><紀績碑>および両者に依拠する『元史』128土土哈伝参照。本書にはもう一箇処TWNQAQ>TWTQAQ [S 225a/16, P 135a/11] と見える。『集史』では前引のQubilai紀の記事とTemür紀即位時の主要人物を列挙した箇処の二度見え、その綴字はTWQTAQ, TWTQAQ [JTS 208a/23, 215a/13], TWQTAQ [JTLa 66a/8。なお後処は脱文] と定まらない。Blochet [Blochet : 500, 587] はTWQTAQに統一し、Boyle [Boyle² : 286, 320] もToqtaqと転写する。漢文文献での表記は大別二様あり、彼の在世中の記録と彼の所有戸に係わる記事の場合は「秃秃合」あるいは「秃秃哈」[元史13, 至元21, V, 己酉; 14, 同24, XI, 辛丑; 16, 同28, I, 壬戌; 18, 元貞1, VII, 辛卯; 19, 同2, II, 庚戌; 39, 後至元2, IV, 甲午; 95, 食貨3歳賜; 117牙忽都伝; 典章49刑11/13a; 至正金陵新志8戸口; 万曆応天府志2郡紀¹¹⁾]、本事件直前の皇慶元(1312)年に死去した闊復の撰になる<紀績碑>以降、および天暦の内乱(1328)後に元廷の実権を掌握したČongyurの第三子El-temür専権時代に撰文・立碑された<世績碑>以後の記録、ないしはQıpčaq軍団系列下の人物の碑伝類では「土土哈」あるいは「吐吐哈」[世績碑; 紀績碑; 元史128土土哈伝; 122鉄邁赤伝¹²⁾塔海伝; 135乞台伝; 138燕帖木児伝; 太師太平王定策元勲之碑(馬石田文集, 明刊本14/6 b-11a; 元文類26/18b-32a); 至正金陵新志3金陵表, 至元23; 「吐土哈」は元史130不忽木伝のみ]¹²⁾。『元史』18, 元貞元(1297)年3月「丙辰, 月児魯・秃秃の軍に炒米万石を給す」と見える秃秃は月魯那衍Ürlüg-noyan, 即ちArladのÜs-temürと並記されるから、おそらくその第三子でのちの広平王の脱脱哈(脱秃哈, 秃土哈とも表記

12) 太田彌一郎, 元代の哈刺赤軍と哈刺赤戸—「探馬赤戸」の理解に関して—, 『集刊東洋学』46, 1981, 1-14より文献・出典等, 裨益した。

する。明らかに混同しないよう配慮した漢字表記)で同名異人。PelliotはToqtoya~Toqto'aの変異形と処理したこともあるが[Pelliot 1930:24],『集史』の一形TWTQAQ/*Tütqāq*を*Kāšgari*の*tütgāq*にあてたのがおそらく最終結論だろう[Pelliot et Hamis:97-98]。漢字表記からも『集史』二形のうちTWTQAQの方が無理がなく、本処のTWTĠAQはPelliot推論を逆に立証する。なお、TudyayがBayanの南征に従軍したとする記録は他に見ない。

12 Bayān Čin(g)sāng-i buzurg 平宋で名高いBa'arin族の伯顔。Cf. Cleaves 1956:185-303。

13 MNZY va NKYAS/Ham., Par.:MYRY va BYKTAŠ/*Manzi va Nankiyas*>m. *Manji, Nangiyas* 周知のように『集史』でManziは漢子、即ち北China住民の、Nankiyasはモンゴル人の、それぞれ南方Chinaおよびその住民に対する呼び名とされ、skr. Mahācīnaという古くからのインド方面での呼称に由来するMačīnと同義とされる[JTS 95/1-2. Cf. Pelliot 1913:460-466, *Polo I*:274-275, Cleaves 1956:226-227 n. 252]。Nankiyasは1305年Hülegü-ulus君主ÖljeitüのPhilippe le Belに宛てたウイグル文字蒙古文による国書の中に*Nangiyas*と綴られる[*Lettres*:55, 73-74, planche IX, X]。なお『集史』でモンゴル人本来の言い方とされた*Nangiyas*は、烏珠留若鞮单于と称した第18代匈奴单于(B.C. 8-13A.D.)の本名「囊知牙斯」と極めて近似する。彼は呼韓邪の子で王莽時代に「莽、中國の已に平ぐも唯だ四夷のみ未だ異なる有らざるを念い、乃ち使者を遣わして黄金・幣帛を齎らしめ、重く匈奴の单于に賂し、書を上まつら使めて言えらく『聞くならく中国は二名を譏すと。故に名、囊知牙斯を今、名、知に更む。聖制を慕い従えばなり』と」と漢風の名に変えたという[漢書99上王莽伝上。同94下匈奴伝下にも同趣旨の文が載る。彼の子は烏鞮牙斯、または王昭君所生の末弟は伊屠知牙師といい、三人の語尾は明らかに共通する]。元代での*Nangiyas*,あるいは-daiをつけた南家台、囊家台、囊家歹、囊加歹等との近似は驚くばかりである。

QWNQWLTW/Ham. QWNQWRTW, Par. QWNQWLTW/*Qunqultu*>m. *Qonggiltu* or *Qongqurtu*? 窪地、谷間の意か。地名特定できず。

ALAYYTAQ/Ham. ALAYTAQ, Par. WALA-BPTAQ (B,Pはrasmの意)/*Ālayn-tāq*>*Alayi-taq*? S・P両本とも二字分のYのrasmが見える。alaiは行列、葬列、パレード、戦列、軍隊[Zenker:85, Radloff I:353-354]。もしAla-taq(斑色の山)の誤記ならば、大アルメニア王の避暑地で歴代Hülegü-ulus君主の夏营地となった西北イランVān湖近くの有名なĀla-tāg[Cleaves 1949:404, 本田1976:81-108]はもと

より異地としても、後世の *Šajara-yi Turk* に *Esen-buqa* あるいは *Tuyluq-temür* の支配地として *Kašgar*, *Yarkand*, *Ūigüristan* (ないし *Muğulistan*) とともに挙がる *Āla-tağ* [*Desmaisons*, text 155, 157, traduction 165, 166] や『西域同文志』4, 14b-15a, 天山北路準噶爾部所属諸山に見える(蒙) *Alay-ayula* が考えられるが(現今 *Ili* 周辺に少なくとも三箇処の有名な *Ala-tau* がある), 別名とせざるをえない。*Alai range* はもとより不適當。『秘史』8/2a, §198, 7308; 8/4a, §198, 7322; 続1/36b, §257, 10533に見える阿^来 *Arai* 山名を「舌」のない阿来 *Alai* と読めば, 前2箇処では明らかに *Altai* 山南に位置するので, 候補となる。或いはく世績碑に「(大徳元年, 創兀兒) 還りて阿雷河に次す。孛伯拔都の軍と相い遇う。孛伯拔都なる者は海都 *Qaidu* の遣わして八隣 *ba'arin* を援けしめる所の者なり。阿雷の上に山有り。甚だ高し。孛伯これに陣す」と見える阿雷**Alai* 河のほとりの高山も可能性もある。示教を乞う。

ŠTRH AGWL/Par. ŠTRH Oğul/Šatra-ugül>Šadra-oyul 『集史』Čayatai 紀に次掲の *JJKTW* の両子の一人(おそらく長子)として ŠADYA [*JTS* 170a], SADYR [*JTLa* 11a] と見え, Blochet は苦しんで ŠADBAN と創作し [*Bloch*: 161], Boyle はそれに拠り *Shadbān* と読む [*Boyle*²: 137]。しかし *Šu'ab* 121a に ŠATRA, S'DR' と明記され, *Mu'izz* P 35b も踏襲して ŠATRA と綴る。本書と一致する *Šatrā~Šatra* が適當だろう。*JTS* の綴字の状態は ŠADRA の誤記である可能性を十分に感じさせる。*Šatrā~Šatra*>Šadra は chess の意の *m.sitar-a*<Pers. *Šatarang*, S. *catur-anga* [*Lessing*: 720a] か。『元史』19, 大徳元(1297)年7月辛未の「沙禿而」, 同21, 大徳10(1306)年正月丙寅の「沙都而」と同名同人である可能性もある。なお *Šu'ab* は『集史』と同様, 彼の代で記述が終わるが, *Mu'izz* になると非常に多くの子孫が列挙され, 本事件以降も中央アジアで彼の系統が繁栄したことが窺える。

JJKTW/Ham. *JJKTW*, Par. HĜK^hTW/*Jijiktū*>Čečegtü Čayatai の庶子 *Močiyebe* の子。*JTS* では Čayatai 紀の本文・附系図 [170a, 171b] とともに7番目に書かれる。Blochet, Boyle が第9子とするのは, *JTS* の本文には見えず, 附系図で10・11番目に初めて現われる *BWK BWQA*/*Büg-buqa* と *NWMQWLY*/*Nom-quli* が *JTLa* 以降の写本で次第に本文の中に繰り込まれてしまった結果である。*Šu'ab* 121a も *JTS* 附系図と同様。ただし *Mu'izz* P 35b は6番目に *Nom-quli*, 9番目に *Büg-buqa* を入れるが, Čečegtü の順番は変らない。特に Blochet 刊本は14世紀書写とされる La, 837/1433年書写の L 両本を参照しながらも, 最も晩く最も改文の多い16世紀書写とされる P本 (Blochet 自身は14世紀と考えた) を重視した。*Šu'ab* 121a は「この *JJKTW* は SČKTW

／*Sečegtü*とも呼ばれた」と傍注し、*Mu'izz*も踏襲する。〈世績碑〉に「(大徳)二(1298)年、北辺の諸王都哇 *Du'a*・徹徹禿等、潜師して急に至り、我が火児哈禿の地を襲う」と見える *Čečegtü* は、少なくとも現在知られている史料では当時 *Du'a* 麾下に同名の別の諸王が存在した形跡はないので、彼である可能性が高い。

15 JWBAŸ／Ham. ČWPAN, Par. Ğūbar／*Jūbār*～*Čūbār*>*Čūbei* Hamblī は Hūlegū-ulus の権臣 Amīr Čopan に引きつられた結果。同様のことが『集史』刊本にもある。Qubilai の拳兵と政權奪取の混乱期、Ariy-böke を裏切って、Čayatai-ulus を再興した Alyu の次子。漢文文献では出伯・朮伯・朮白。泰定 3 (1326) 年に肅州酒泉の西南の石窟群から成る文殊山の靈場を Čūbei の嫡孫で当主の *Nom-daš taysi* が改修した紀念の漢維合璧碑〈重修文殊寺碑〉では主罷¹³⁾，ČWB'Y／*Čūbei* [漢文10行目，ウイグル文7行目。ウイグル文字二字目は耿世民・張宝璽附拓影では不明確。耿の転写 cubay は W と読んでいる。Cf. 耿・張：257，末尾拓影]。Marco Polo に後掲の兄 Qaban と Qubilai 辺境兄弟王として登場し Pelliot まで長く疑問だったことでも有名 [Cf. *Polo* I：262-263，*Chapitre CⅦ*：92-93，杉山1982, 1983]。

NMĠWLY／Ham. LMGWLY, Par. LMGWLY／*Num-ğūli*>*Nom-quli* 本書で見える他の二処 [S 152a/16, 25, P 26b/6, 19] でも S・P 両本とも語頭は L だが，内容から N とする。Čūbei の後継者。『集史』Čayatai 紀 NWM-QWLY [S 170a, 171b]，*Mu'izz* P 37b NWM-QLY はともに15子の5番目。Šu'ab 122a NWM-QWLY は6番目。漢文文献では南忽里・納忽里・喃忽里・南木忽里・那木忽里。〈重修文殊寺碑〉では喃忽里，*Nom-quli* [ウイグル文は拓影では判読しにくい。耿・張1986：257，263]。Cf. *Chapitre CⅦ*：93。

BYANTAŠ／*Buyān-tāš*>*Buyan-daš* JTS 170a では BWYWN-TAŠ, 171b の附系図では BYAN-TAŠ で，いずれも Čūbei 15子の6番目。Blochet 刊本の BWTWN-TAŠ [Blochet：176]，Boyle の Nom-Dash [Boyle²：144]，Hambis の Bütü-nomtaš [Chapitre CⅦ：61] は誤り。Šu'ab 122a は BWYAN-TAŠ, BWY'N-T'S で5番目。*Mu'izz* P 37b は8番目に置き，BWYALNA-TAŠ という特殊な形で綴られるが，*Mu'izz* L 38b は順

13) 1986年訪中旅行の途次，偶然に恵まれて本碑漢文拓片を瞥見し得た。ウイグル文字は見られなかった。耿・張では「主[伯]」とするが [263]，筆者には[罷]の上辺・右辺の残跡が見え，『隴右金石録』の「龍」字のみから正解をその3年前に筆者に教示された佐藤長の慧眼にあらためて驚いた。cf. 杉山1983：694 n.1.

番は変わらず、*rasm* のみだが *BWYANTAŠ* と読める形。 *Mu'izz* P の綴字中間の要素 LNA は N の語尾形を見誤ったためだろう。管見の限り、漢文文献に彼の名を見つけない。

KWNJAK / *Kunjak* > *Könčeg* 『集史』, *Šu'ab* に見えず, *Mu'izz* P 37a で初めて Alyu の長子 Qaban の三子のうち最初に現われる。漢文文献では寛徹。 Cf. 杉山1982。

QBAN / Ham. QYAN, Par. Qapan / *Qaban* 『集史』では QABAN [JTS 170a, 171b], QBAN [203b]. *Šu'ab* 122a : QABAN, Q'B'N. *Mu'izz* P 37a : QBAN. 漢文文献では合班, 哈班。 Cf. *Polo* I : 262-263, 杉山1982。

16 SYKJW / Ham. SYKHW, Par. SYKHW / *Sik-jü* > *Süg-čü* 肅州。管見の限り、『集史』では Činggis 紀の西夏攻撃に関して SJW / *Su-čü* [S 115b / 7] と見えるのみ。10世紀の *Ḥudūd al-'Ālam* では SWKJW と SHJW の両様が異地として別箇に挙げられ [Minorsky : 85, 232], 11世紀の *Gardīzi* では17世紀書写の Cambridge 大学所蔵写本によると SYHJW と読み取れる [Martinez : 197, L 1 / 12. なお Martinez 自身が *Sax-Čau* (137 / 7-8) とするのは誤読]。一方、やや時代が降る Ḥafiz-i Abru, *Zubdat al- Tavārīḥ* からの抜粋による Šah-ruḥ の遣明使節旅行記では三箇処とも SKČW / *Sukčü* [Maitra : 15, 17, 33]。本処記事の SYKJW は *Gardīzi* の綴字に近い。同時代の蒙古文・ウィグル文での肅州の例を瞥見すると、敦煌莫高窟144窟 (Pelliot No. 6) に残る肅州から来た巡礼者たちが至治 3 (1323) 年に墨書したウィグル文字蒙古文による落書き 5 行目には SWYKČW / *Süg-čü* [PTH I : planche 12, Kotwicz : 240-247, *Monuments Préclassiques* : 33], 泰定 3 (1326) 年の立石〈重修文殊寺碑〉ではウィグル碑面13行目にやや鮮明さを欠くものの S(W)YKČW / *Süg-čü* [耿・張1986 : 258, 末尾拓影], 至正21 (1361) 年に酒泉東門に立石された〈大元肅州路也可達魯花赤世襲之碑〉の 3・11・12・18行目に *Süg-čü* [耿 : 466-447. 附載の拓影では全く判読不能], 莫高窟217窟 (Pelliot No.70) に残るウィグル文字とパスパ文字によるウィグル語刻文では SWYKČW-B'LYQ / *Sük-čü baliq* [Kara : 56, 58. 転写は Kara のまま。以上 Cf. 森安1983 : 225-226]。本処の綴字は SwYKJW / *Süg-čü* の意だろう。

17 AYMLHWAJH / *İmil-ḥvāja* > *Emil-ḥvāja* 『集史』 S 171a, *Šu'ab* 120a に列挙される Du'a 10子の中には見えず, *Mu'izz* P 32b で初めて Du'a の21子の15番目に現われ, かつ TWQLQTYMWR / *Tuqluq-temür* の父とされる。Tuyluy-temür の父とするのは Šāmī, Yazdī も同様 [Tauer : 13 / 28, Yazdī : 81b / 16]。

20 BARS KWL / *Bars-Köl* 現今の Barkul 巴里坤 (哈薩克自治県となっている)。

〈賈公神道碑〉[道園学古録17/8b-9a, 類稿40/29a]に「至大二(1309)年, 上(= Qaišan)大いに北方軍に賚す。内府の金帛を出すこと鉅万。使を択ぶに, 將に指すに公の典故に明習し, 軍中の事宜を知り, 又た能く心を用い, 勞儉を憚らず, 任ずるに足る者有るを以て, 因りて遼陽行省平章に命じてこれと偕に軍中に即き, 太師月赤察兒 Öcür と定議してこれに給せしむ。公, 和林(Qara) Qorum の北, 金山・亢海 Qangyai・八兒思闊等処を徧歴し, 恩食均しく布せられ, 人情胥な悦び, 辞声を異とする無く, 名は北境に溢る。守辺の諸侯王, 其の廉慎なるに服し, 累章して以聞す」と見える八兒思闊は Bars-köl であり, そこにいう Qaišan 時代の北・西両面の駐屯元軍の状況は本処記事と軌を一にする。なお『元史』15, 至元25(1288)年正月癸卯の「八立渾」は Barkul に近い表記。Cf. *Polo*: 83-86。

21 BLARGY/Bularyi 『元史』135明安伝によれば, 次掲の Qangli 族の明安 Ming'an < Mingyan の次子は孛蘭奚 Bularqi~Bularyi といい, 昭武大將軍(正三品上)・中衛親軍都指揮使から銀青榮祿大夫(正一品)・大尉に至ったという。翻って, 『元史』本紀より孛蘭奚の記事を捜すと, (A)22, 大徳11(1307)6月「戊申, 特に尚乘卿の孛蘭奚・床兀兒 Čong'ur に授けて並びに平章政事たらしむ」, (B)同7年「壬申, 御史大夫鉄古迭兒 Tegüder・中書平章政事床兀兒 Čong'ur・枢密副使孛蘭奚に命じて即位を以て祇んで太廟に謝せしむ」, (C)26, 延祐4(1317)年7月壬午「特に中衛親軍都指揮使孛蘭奚に太尉を授く」, (D)27, 至治元(1321)年7月「癸未, 太尉孛蘭奚を封じて和国公と為す」, (E)37, 至順3(1332)年8月「乙卯, 燕鉄木兒 El-temür, 中宮の旨を奉じて駙馬也不干 Ebügen の子歡忒哈赤・太尉孛蘭奚・句容郡王答隣答里* Darindari・僉事小薛 Söse・等に金銀・幣鈔を賜いて差有り」と五箇処に見える(元史133孛蘭奚伝は別人)。以上の『元史』本紀において武宗 Qaišan 以降, El-temür 専権時代まで軍事中枢にあったように窺知される孛蘭奚が, 本処記事によって仁宗 Ayurbarwada 時代に実際に西辺軍団長として最前線におり, しかも明安伝によれば父 Mingyan は Qubilai 時代より西面 Beš-balıq 方面最前線にいて大徳7(1303)年に戦死したというから, その後の前線指揮は貴赤 güyügči 親軍都指揮使司達魯花赤 darıyači(のち万户)となった長子の帖哥台 Tegetei ではなく, 次子の Bularyi がおそらく引き継いで本事件まで10年間駐屯し続けていたことになる。さらに本処記事に北面最前線軍団長として見える Čongyur が即位前の Qaišan とともに以前から西モンゴリアに進駐していたことから考え, Čongyur と Mingyan・Bularyi 父子は北・西両面全元軍団の前線に当初から並び立つ存在であり, それが Qaišan 即位時における殊遇(A)(B)となったこと, また Bularyi の güyügči 軍団と Čongyur の Qipčaq 軍団と

は、本来自身の手勢を豊富にはもたなかったと推測される Qubilai が長期にわたって熱心に作りあげた元帝直属の親兵部隊（近代概念でいう常備軍 *Standing Army* に相当するか否かは今後徹底検討されるべきであろう）のうちでも遊牧戦闘力として意味をもつ稀少な存在であり（元史等の漢文文献の表面に目立つ漢人・南人兵団はおおむね実は屯田・兵站用人員で内陸アジア地域での戦闘には立てない）、そのため両軍団とも対 Nayan, 対 Qadaγan, 対 Qaidu・Du'a, さらにこの対 Esen-buqa と、大元ウルスの命運にかかわる主要戦役には必ず投入され、その結果として Qipčaq 軍団系だけでなく、Bularyi もまた次第に政治地位を高め(C)・(D)、遂には El-temür が Qaišan に遺児政権を樹立した時、Bularyi もその政権の要員として参加していたらしいこと(E)、以上の諸点が判明する。これらの手掛りを与えてくれる本処記事は大元ウルス内部政局の考証にも有益な情報といえる。なお、*bularyi* は、遺失物の意 [Polo I : 112-114, 本田1982 : 365-375], 漢文文献に見える術語「孛蘭奚」の読み・意味もこれにより有力な一証を得る。

KYWKJY MYMKGANK / *Güyügči Mingyan* この人物は *Marco Polo* の記述と『元史』が完全に一致する例として非常に名高い [Polo I : 66, 572-573, II : 778-779]。明安伝によれば、*Mingyan* は至元22(1285)年、蒙古軍八千を領して別失八刺哈思 *Beš-balaqasu* (m. *balyasu* (n) は当時のパスパ字蒙古文碑でも *balaqad* (pl.) と表わす。Cf. *Monuments 'Phags-pa* 諸処) > *Beš-baliq* に至り、*Qaidu* 軍と連年交戦した。その派遣はおそらく至元22(1285)年 Čayatai 系 *Ajigi* の *Qara-qočo* 戦失敗（〈世勲碑〉の至元十二年は二十二年）後、代行した *Bayan* に同行したもので、現地で Čübei に従ったのだろう。*Mingyan* が率いた貴赤 *güyügči* 軍団は、元来「民の蕩析して居を離れ、及び僧道・漏籍の諸色人の差徭に当たらざる者、万余人」[明安伝] から成る毛色の変った諸族混成部隊で、出身からは必ずしも遊牧系軍団とはいえないが、平時は早脚・健脚者 *güyügči* の名の如く、特技を生かして獵犬の飼育管理にあたり [Marco Polo; Benedetto : 86], 結果として機動性に富む特殊訓練部隊であったと思われる。『通制条格』28/11b-12a, 至元28(1291)年11月22日、灤河以西地区の狩獵に関して御史台が貴赤明安 *Güyügči Ming'an* と合議しているのは、*güyügči* が狩獵関係であった証拠となる。また *güyügči* 集団の居処がおそらく灤河以西の元帝直属の夏營地（いわゆる金蓮川を中心とする地区）の内に設定されていたことも窺知される。ここに示される *Qangli* と元帝の狩獵関係者の二つの要素から注意すべきなのは、*Qangli* 王族出身で元帝直属の *sibaγučī* (鷹匠) 集団の長であった阿沙不花 *Aša-buqa* である。彼は Rašīd によれば元帝の主要夏營地の1つであったという野狐嶺 (HWNKAN DBAN / *Hūnagān-dabān* > *Hūnegen-daban* ~ *Ünegen-daban*。

JTS : 95a/22-23) 附近の桃山一帯に昔宝赤 *sibayuči* 集団専用の牧地を構え、牧地内に鷹食提供用の三千の民戸を存置するなど、Qubilai の膝下で確乎たる基盤を築き、Qubilai 末年に Altai 方面遠征に出た皇孫 Temür に配属・従軍したまま遠征帰還部隊の軍勢力を背景に樹立された成宗 Temür 政権の一翼を担うことになった。Temür 崩後の政争では Darmabala <skr. Dharmapāla の寡婦 Dagi とその愛児 Ayurbarwada に一旦、大都を掌握させる側に回ったが、両者の実子・実兄である Qaišan がモンゴル本土諸王の支援を背景に北・西両面軍団を率いて進撃してくると、Qaišan 自身の指名もあって直接会談し、両勢力の和合を実現せしめた。Qaišan 時代には平章政事に再任され、康国公 (Qangli に因む) にも封ぜられ、おそらくその *Sibayuči* 軍団が昇格して Qangli 族軍団の意で広武康里侍衛親軍都指揮使司と漢称され、本事件に先立つ 5 年前の至大 2 (1309) 年に死去した [〈勅賜康里氏先塋碑〉金華黄先生文集 28/1, 元史 136 阿沙不花伝]。Marco Polo によれば、対 Nayan 戦の主力は *sibayuči* 軍団であった。この Aša-buqa 麾下 *sibayuči* 軍団と Mingyan・Bularyi 父子麾下の *güyügči* 軍団との関係がどうであったか直接言及する記事をまだ見つけていないが、獵犬係の後者は鷹匠たる前者の組下にあって同じく灤河以西に居処を置き、平時は元帝への狩獵奉仕を分担していたのだろう。灤河以東の武平路に居処する Qıpçaq 軍団が黒馬乳の作製を平時職掌として哈刺赤 *qarači* と呼ばれたこととあわせ¹⁴⁾、この三つの本来は下級の、しかし元帝直属の特殊職掌部隊は類似のパターンで上昇し、結局大元ウルス後半期の中央政局を左右・掌握することになる。なお Marco Polo に Mingyan の兄弟として見える Bayan について Pelliot は、『集史』Qubilai 紀の北・西面の辺將を列挙した中に見える綴字判読の困難な「BABAN KWBWKJY の子 NMKYADAY」[JTS 208a/24] を「Bayan güyükçi の子 Nangiyadai」と読み (Blochet : 501 に拠る Boyle² : 286 が Nayan Küyükchi とするのは根拠に乏しい)、息子とされた Nangiyadai を『元史』131 に伝のある Naiman 族の有力武將囊加歹 *Nangiyadai* にあて、伝にいうその父の名「麻察」と Bayan が合致しないことに苦慮する [Polo I : 66]。考証前半は賛成でき、今後『集史』Nangiyadai の考証・同定に成功すれば、Marco Polo, 『元史』および本書のみならず、『集史』までが連関することになる。

23 TWBWT/Ham. TWBWŞ, Par. Tübüt/Töböd~Többöt~Töpüt Tibet のこと。

14) 明代内蒙古諸部落には元代の職掌を集団名称として採った場合が幾例かある。喀喇慎 Qarašin, 錫伯沁 Sibayučin は、明らかに *qarači*, *sibayuči* に由来する。ただし、これは名称上の一一致であり、系譜上の現実を伴ったかどうか確実な文献立証を果たした例を聞かない。

イスラム文献では通常 TBT と綴られ [ex. JTS 208a/28], 従来 Tubbat/Tibbat/Tubbit と読んでいたが [Yule²: 917-918], ここでの形は Qara-balyasun 碑文ソグド文の *Twp'wt*, Orqon 碑文その他の *Töpüt*[cf. 森安1987: 48, 65], あるいは『秘史』の脱字都_都 *Töbödöd* 西番每(pl.) [続 I, §260, 10730] 等と同系列の, 明らかに W/ö, ü を含んだ発音を指示する。本書における Turco-Mongolian の単語の綴字は, 『集史』以上に Turco-Mongolian の発音ないしはウィグル文字表記と対応する形で書かれており, 文章の猥雑・晦澁と対極の特徴である。

JATAY/P. JANTAY, Ham. JANTAY, Par. Ğantāi/Čatai > Ča'atai? S 本の綴字の中に P 本が明示する N があるかどうか (あっても rasm), 手許の写真では判然としない。今はかりに Čayatai の変異形と見て Čatai とするが定案でない。

MĠWLṬAY DW WYN-ŠAy / Ham. MĠWLṬAY DWDYN-ŠAR, Par. Muğultai Dudnša' / Muğultai Düw-šai > Muğultai ~ Mongyoltai-duönšai S 本では DW WYN-ŠAy のうち三字目の W が D と弁別しがたい。P 本は D に写し, Hamblī · Parvisi はそれに従う。しかし, WYNŠAy は明らかに既述の *önšai* 「元帥」であり, DW は「都」の転写に相違ない [cf. Doerfer III, 207] から, 「都元帥」の意。漢文文献で近似の名をもつ10人ほどを消去法で処理すると, (A) 『站赤』2, 至元10(1273)年6月「十八日, 兵刑部侍郎伯朮 *Baiju* 奏すらく, (乞 or 可) 失阿兒 *Kis'ar* ~ *Kisqar* or *Kas'ar* ~ *Kaskar* > *Kāšgar* · 斡端 *Odon* > *Hotan* の地, 玉を産す。…省臣, 已に擬して本処の官, 忙古斛拔都児をして官物の内より脚價を支して運来せしむ, (B) 『元史』133旦只兒伝「(至元)十九(1282)年, 諸王哈班 *Qaban* · 元帥忙古帯の軍に従いて斡端 *Odon* に至り, 叛王兀廬* *Uluq* 等と戦い, これに勝つ, (C) 『大元馬政記』8 a 「(至元)二十(1283)年正月四日, 丞相火魯火孫 *Harqasun* 奏すらく, 忙兀斛拔都の軍二千人, 人ごとに馬三匹を給す…, (D) 『元史』12, 至元20年3月「辛酉, 諸王合班 · 弟の忙古帯の所部の軍士の戦功に銀鈔 · 幣帛 · 衣服を賞すること各おの差有り, (E) 同年10月丁酉「忙兀帯, 蒙古 · 漢軍を増して辺を成らんことを請う。これに従う, (F) 同年11月「己卯, 諸王朮伯 *Čübei* · 蒙古帯等の請に従い, 也秃古等に銀鈔を賞して以て戦功を旌す, (G) 同22(1285)年「諸王阿只吉 *Ajigi* · 合兒魯 *Qarluq* · 忙兀帯 · 宋忽兒 *Songqul* · 阿沙 *Aša* · 合丹 *Qada'an* · 別合刺 *Bei-qara* 等及び官戸の河西に散居する者に羊馬價鈔三万七千七百五十七錠 · 布四千匹 · 絹二千匹を賜う, (H) 同24, 皇慶2(1313)年7月「丁未, 諸王火羅思迷 *Hvārazmī* · 脱斡 *Toyan* · 南忽里 *Nom-quli* · 駙馬忙兀帯に金二百兩 · 銀一千二百兩 · 鈔一千六百錠 · 幣帛を賜い, 各おの差有り」と, 以上七箇処が残る。人名表記上, 忙古斛 · 忙古帯 · 忙兀帯の形は *Mangyu-*

*tai*を表わし、蒙古帯 *Mongyoltai* と異なるように考えがちだが、実際には蒙と忙は互用される [ex. 也速忙可 ↔ 也速蒙哥。耶律禿花の曾孫忙古帯は『元史』で蒙古歹、忙古歹と書かれ、『元文類』41, 経世大典序録, 政典総序, 征伐, 建都では蒙古台]。(A)(C), (B)(D)(F)は少なくともそれぞれ同一人物であろう。内容上, (D)の「諸王合班・弟の忙古帯」は奇異だが, (B)(F)との明白な連関から, 「諸王合班・弟朮伯・忙古帯」の脱文か, 或いは「弟」は(H)の「駙馬」の意か。(G)(H)は(B)(D)(F)に近い。地理上は(E)が不明なほかは残りはすべて河西関連と見られ, うち(A)(B)は同地である。時間上は(H)が離れる。以上すべてが同一人である可能性も存する。本処の *Muğultar* 都元帥とは, 地理上の近似, Čübei 家との連関の示唆だけでなく, (B)「元帥忙古帯」からも接点を得られる。『集史』Abaqa 紀に「その時, *Muğultar* という名のものが *Qān* より遣わされた *Türkistan* の *šahna* であった。*Barāq* はその地位に坐わるよう *Amīr Bekmiš* を派遣した。*Muğultar* は *Qan* 陛下の許に赴き事態を上奏した。*Qān* は大 *Amīr* の *Qoniči* という名のを *Bekmiš* を殺害し, *šahna* の職に踞えるために派遣した。*Barāq* は一人の *amīr* を 3 万人とともにその駆逐のために進ませた。*Qoniči* は敵しえぬことがわかったため, *Ḥitar* に帰還した。*Barāq* の軍隊は *Ḥutan* を劫略した」[*JTS* 243a/29-243b/3, cf. 劉1985: 47, 54] と見える *Muğultar* > *Mongyoltai* が, *Ḥotan* ~ 'Odon との関係から, 上記の少なくとも(A)(B)(C)(D)(F)((G)・(H)も?)と同一人物である可能性は十分にある。

II

歴史上, 本処記事から以下ふたつの点が引きだせる。第1は, 従来ほとんど不明とせざるをえなかった1300年代と1310年代の *Altai* 以西における元側の状況について, 僅かではあるが確実な手掛りをえたことである。*Qaidu* 晩年の対元戦場は *Altai-Qangyay* 間にあった。それは, 同方面にある *Ariy-böke* 旧領の大半を継承した *Melig-temür* が, 1296年に兄の *Yobuqur* と *Möngke* の孫 *Ulus-buqa*, および *Ariy-böke* 旧臣で一時期 *Qubilai* の重臣ともなっていた *Dordaqa* ~ *Dorduqa* (*JTS* 21a/14-20: *TWRTAQA*, *JTS* 217a/25, 217b/6: *DRDQH*, *Šu'ab* 132b/136b: *TWRTAQA*, 朶兒朶懷・朶魯朶海・朶而朶海・朶兒朶海・朶兒朶哈・朶兒答哈) が *Qubilai* 死去に安心して成宗 *Temür* に降附したのちも, 依然 *Qaidu*・*Du'a* 陣営にとどまったからである。その結果, *Qaidu* のモンゴル本土攻撃は可能となった。1301年 *Qaidu* の死去後, 後継と期待された *Oros* ではなく, Čapar を推して Ögödei 諸派の分裂を導いた *Du'a* は東西講和を主導しつつ元帝と結んだ。本書によれば, 704/1304-05に「彼(= Čapar)の駆逐のため,

(Du'a)はQānから助力と恩寵を求めた。Toyači丞相とČübeiの子LMĠWLY/*Nom-qulī*, YABĠR-bahadurは10万人隊の勇敢な兵士とともにČWL/*čöl*を越えて、Du'aと合するよう命令(farman)が発せられた」[S 152a/15-17, P26b/4-7], 「ToyačiとDu'aの叔父の子であるLMĠWLY/*Nom-qulī*は、Du'aと合すると、増大した諸軍と一緒にČaparを追跡し、諸方から進んで彼を求めた」[S 152a/25-152b/2, P 26b/18-27a/2]と、元軍とDu'aとの協同作戦によるČapar追討が明記される。Toyači丞相は本処記事でも元北面軍の主将、Nom-qulīは同様に元西面軍の主将である。YABĠR-bahadurはいま成案がない。北・西両面の主将が越えたčölは『站赤』の「西面川両接界地」「川地東西両界」[5, 皇慶元(1312), XI, 18]「彼方川石の地」[6, 延祐元(1314), VI, 23]「西辺川地」[同VII, 18]におそらく相当する。Čaparは東・南からの両元軍、西からのDu'a軍の三方から包囲されたことになる。この直後、Du'aはIli河谷上流のČayatai家歴世のQYAS/*Quyās*草原に大クリルタイquriltay-i buzurgを挙行してČaparを廃す[S 153a/16~, P 27b/19~]。Čaparの失墜とDu'aの制覇はDu'a単独の力によるのではなく、元軍との合作の産物であった。上記記事が本書におけるToyači・Nom-qulīの初出である。この間、Altai方面元軍の総司令官QaišanはAltai地区に駐営を続け¹⁵⁾、1306年にIrtiș方面へ出た。『元史』22, 武宗本紀冒頭は手際よく概述する。

(大徳)十(1306)年七月、脱忽思圈**Toquz+++*の地より按台Altai山を踰え、叛王斡羅思Orosを追いて其の妻孥・輜重を獲、叛王也孫禿呵*Yesün-to'a*等及び駙馬伯顔Bayanを執う。八月、也里的失*Erdiș*の地に至る。諸降王禿滿Tuman~Tümen・明里鉄木兒*Melig-temür*・阿魯灰*Abyui*等の降るを受く。海都Qaiduの子の察八兒Čapar, 都瓦Du'a~*Durwa*の部へ逃ぐ。尽く其の家属・營帳を俘獲す。按台山に駐冬す。降王禿曲滅*Tögme*, 復た叛す。与^{とも}に戦いこれを敗る。北辺, 悉く平ぐ。十一年春, 成宗の崩ずるを聞く。三月, 按台山より和林(Qara-)Qorumに至る。諸王・

15) Qaišanの営地については、Pelliotが読んだ1305(乙巳, 大徳9)年10月18日JiramutuよりTibetに出されたパスバ字蒙古文の令旨(üge)文書[Pelliot 1949: 621-624, *Monuments 'Pags-pa*: 38-42]と馬兒年(丙午, 大徳10(1306)年, 即ちIrtiș戦役の時)7月21日「把不匣納」**Babuqana*?より山西霍山に出された蒙古語直訳体白話漢文の令旨碑[山右石刻叢編30/6a-7a, 蔡美彪・元代白話碑集録には著録されていない。cf. 入矢義高, 蔡美彪氏編「元代白話碑集録」を読む, 『東方学報』26, 1956, 225.]のふたつの現物が残る。両地ともいま成案がない。

勲戚，畢く会す。

Čapar と Oros は,⁵Qasi(-n or -dai)の子 Qaidu の子, Tögme は¹Güyüg の長子 Үвaja-oyul の長子 [Šu'ab 124b], Tuman は⁷Melig の長子 [Šu'ab 127b], Alyui は³Gučü の長子 Širemün の子 Boladči¹⁶⁾の子 [Šu'ab 125b], Yesün-to'a は Melig-temür の第 3 子 [JTS 214a/13, Šu'ab 137b] か或いは⁶Qada'an の子の也孫脱 [元史107宗室世系表。Šu'ab 127a には見えない]。Melig-temür の長子 MYNKQAN/Mingyan [JTS 214a/13] は本書にて25, II, 708/14, VIII, 1308にHülegü-ulusに投じたことが知られるもの[S 171a/21-22, 229a/7, P 55b/17, 140b/10], 他子は全く不明であり, 武宗紀は各系の代表者を列挙していることから, 後者か(人名左肩の数字は Ögödei 諸子の順番)。Ögödei7子のうち,⁴Qaračar 系は嗣子なく絶え, 実質6系のうち¹⁷⁾,²Köden の系統だけは Möngke・Qubilai に与して涼州永昌を本拠に Tangyud 河西地方に別の集団を維持した。残る西方 Ögödei 旧領方面の 5 系すべてがたたかれたことになる。Qaidu 時代, Qaidu 自身は Talas—Sayram 間に駐営し, Du'a は Ili 河谷を本拠としたと見られる。Du'a 領と Melig-temür 領の間に Qaidu 家を除く Ögödei 4 系の居処が集中し(Emil-Qobuy は Güyüg 系, Irtiš は Melig 系), Du'a により Talas 地区を失なった Čapar・Oros も来ていた。この Ögödei 家歴世所領への元軍の全面侵攻と Ögödei 諸派の降伏が一過性ではなかったことは, 本処記事によって確実となる。〈世績碑〉〈紀績碑〉が述べるように, Čongyur は Qaišan 軍団の先鋒部隊長であった。その彼が, 武宗紀にいう Irtiš 戦役よりすでに 7・8 年経過した 1313/14 年にも依然 Ögödei 領方面に屯駐しつづけている。上掲両碑では, Čongyur は 1307 年成宗死去に東還する Qaišan に従い, 武力即位に成功すると, すぐに任地に戻った。Toyači もまた前述 704/1304-05 の Čapar 挾撃作戦のあと本処記事の Qobuy—Irtiš? (後掲記事では彼の agruq《兵站》は Erdiš にある)に駐屯をつづけたと見られる。本処記事の Čongyur の営地が比定できないのは残念である。しかし副将の Čongyur が Toyači の後方にいるとは考えにくい。Toyači が Melig 系・Güyüg

16) Šu'ab 125b には Alyui 4 兄弟について, Alyui と Qoniči に「Qaidu のもとにいたが今は Melig-temür とともに Qan のもとに赴いた」と傍注があり, Qadai には「Qan のもとにいた (いるの誤記?)」, Sadur に「Qan のもとにいる」と傍注がある。Mu'izz P 41b は, 最後の Sadun について「Qubilār-qā'an のもとにいる」と少し手を入れ, 他は同文。

17) 『元史』95, 食貨 3, 歳賜の条では, Ögödei 一門に与えられる年額賜与が均しく 6 等分されている。

系の本拠を制圧し、おそらく Čongyur はさらに前方にあったのだろう。そして両者の兵数を単純合計すると、17万というやや信じがたい大兵团による軍事制圧であった。いわゆる Ögödei-ulus と呼ぶる政治結束は、まさにそれこそによって終に同方面から消えたのである。Qaišan—Ayurbarwada 時代に元帝のもと Činggis 一族の融和・合一が東西諸文献で唱われる背後には、元帝直属軍団の長期にわたる大規模な旧 Ögödei 領進駐があった。以後、Ögödei 諸系は、Alyui が代表する³Güčü 系は襄寧王、Tuman が代表する⁷Melig 系は陽翟王、⁵Čapar 系は汝寧王と、いずれも河南に設定された投下領に因む王号を代々授与され、²Köden 系荆王などととも大元ウルスの枠内で各系個別に把握される状況が固定する。この元北面軍団と Čayatai-ulus の境界に関して注目される記事が本処記事のやや後に、「Turkistan 地方の果てにある BWLAD/Bolad の町の *šahna* であった Quljuq は Toyači のもとより(遣わされていたが)、奇襲の企てに気づき、急いで Toyači のもとへ逃げ、彼に ALANS? の悪魔たちの来襲について知らせた。Toyači はすぐに出立し、自分の兵站(*agrūq*)の廬舎を ARDŠ/*Erdiš* の川より引具して夏营地(*yäyläq*)SGRY/*m. Sayuri?*(「掃里」,居処)の山麓にて——その前には HWLYATW/*m. Huliayatu* という名の河音高い一河であり、水量多い一流が、聳え立つ一山の麓と石の多い或る場所をめぐるって流れる——1万の勇敢で手練れの軍とともに敵の到着を待ち構えた」[S 224b/12-18, P 134a/15-134b/3] と両軍全面開戦直前 Boro-tala の主邑 Bolad も元側に属していた¹⁸⁾。既引の〈趙王先德加封碑〉に丞相脱禾出八都魯 *Toyači-bayatur* が五百人の護衛をつけて達せしめたという Kōrgis の殞所「卜羅」*Bolad* は、この Bolad であり、時期も上記記事とそう遠くない。Bolad は Büri の所領で名高い Čayatai 家ゆかりの町であった。Bolad より Ili 河谷までは Sayram 湖と Tarki 山口があるだけである。大元ウルス北面では、Čayatai-ulus 軍の布陣線は Ili 河谷を出ていない可能性が高い。開戦後、元北面軍が「Čayatai の *ulus* と *urūg* の *yürt* である夏营地

18) 『元史』135徹里伝に「成宗の時、盜、博落脱兒の地に拠る。命じて兵を將いてこれを討ち、三千余人を獲、其の酋長を誅して還る」とあるのは、Temür 死去の直前、Qaišan の Irtyš 戦役直後の同地をいうのかもしれない。また Berlin の TM 214 文書は数少ない中央アジア発見の蒙古語命令文書の一で、羊の年 (*qonin jil*) に *Berke-temür* (ないしは *Big-temür*) が出した *üge* (m.言葉。Qān の命令が *jarliy*, 諸王以下はすべて *üge*) である。発令地が Bolad であるため、従来 Čayatai-ulus 文書であるとされてきた [H. Franke: 7-14, *Haenish*: 36, *Monuments Préclassique*: 212-213]。しかし冒頭は *qan-u jarliy-iyar* の定型文言で、しかも抬頭して始まり、かつ内容は *Iduy-qud* 以下、*yučing* (右丞), *sočing* (左丞) 等が続出する。再検討を要する。

TLAS / *Talās* と冬營地 AYSNKWK / *Īsan-kūl* > *Esen-köl* (Варгольд は Issik-kul とする [Semirechyé : 133]。即ち TM 94D 135 蒙古語文書の *Isig-köl*。cf. *Haenish* : 33, *Monuments Préclassiques* : 224-225) [S 227a/15-16, P 138a/2-3] をすぐ陥すのも理解できる。不明な Kuk-hur は Ili 河谷中の Tarki 山口寄りに求めるべきだろう。或いは1305年前後, Du'a との間に Tarki をもって元北面軍との境界とし, その東西を各自制圧する協約が交わされていたのかもしれない。

第2は, 大元ウルス西面の甘肅・Uiguristan 情勢に関する新情報がえられることである。とりわけ注目されるのは, Čübei 一門が肅州から Qomul・Uiguristan までをおさえ, しかも12万という大軍団を擁していたことである。Nom-qulī の子 Nom-daš taysī (JTS 171b では Nom-qulī の子として梓は書かれながら, 「知られていない」と傍注され, *Su'ab* 122b では NWM-TAŠ, NWM-T'S / *Nūm-tāš* > *Nom-daš* と明記されるのは注目される) 自身により肅州文殊山に〈重修文殊寺碑〉が立石されたのは, 肅州地区が Čübei 宗家の yurt に相違なかったためであり, さらに同碑の中で Nom-daš taysī が「Čayatai の位に坐す Nom-daš taysī / Čayaday orun-inta olurmış…» [耿・張: ウィグル文 5 行目, 257] と自称するのは, 本書に従えば 7~10万を動員する Esen-buqa 陣営以上の軍事力を保有していたからである。『ヴァッサーフ史』には Öljeitü 即位のさいに送られてきた史上名高い講和の使者たちは, Qa'an と13の aīmaq, 諸王 Qaidu の Čapar と Du'a, Qoniči と TRSW, Čübei と Qaban, Qutluğ-hvāja の許より来たという [Vaṣṣāf : 475/12-13]。大元ウルス, Qaidu-ulus, Joči-ulus, Čübei 兄弟, 現 Afgan-turkistan の Čayatai 西面軍の5グループである。Čübei 家は Qaidu-ulus と並び扱われる。至元22・23(1285・86)年の Ajiqi の太原路後退後, 「邠王木(=朮)伯, 兵を西陲に綏ぶ」[析津陳氏先塋碑] 張養浩『扁田類稿』乾隆55年刻本 9/9a] 情況は, 本処の Nom-qulī を経て, 「至治中(1321-23), 喃荅失王と同じく甘肅諸軍を領す」[世勲碑 漢文面。学古録24/8b, 類稿39/5a, 隴右5/60b, 原石[党寿山99]はみな喃荅失王。元文類26/4bのみ喃荅失里。宗室世系表に見える表記と同一となり, *Nomdaširi* と読まざるをえなくなるが, 誤記だろう。ウィグル文面は当該箇処欠損] と, Nom-daš taysī 時代も同様であった。両属する Uiguristan をはさんで1300年の初頭以降, ふたつの Čayatai 集団が東西に並存したことは疑いない。Čübei 家は嫡統の幽王家(肅州)のほか, 1330年代に沙州に西寧王家を分立させ, かつ後嗣の絶えたらしい Qaban の子 Kōnčeg の跡を Čübei の末子が継いで, のち明代 Qomul 王家となる [杉山1982]。西寧王家の血統上の祖 Buyan-daš が本処記事で宗家の兄 Nom-qulī と並記される有力者であったことがはじめて確認でき

る。明代 Qomul 王家の Qomul 在住の淵源も、本処記事によって名義上の祖であるらしい Qaban の子 Kōnčeg の Qomul 居住に確実に溯ることが判明する。Kōnčeg の Qomul 居住については、本書の開戦記事に、「かくして『敵どもをその幕営地(yūrt)から駆逐しろ。彼らの夏営地(yāylāq)と冬営地(qiślaq)を自分の所有に奪え』との Qan の勅書(yarlıg)の命令(hukm)が届いた時、Toyači 軍は相手を3ヶ月行程まで駆逐し、自分の所有に奪った。JWBAY/Čübei の息子たちの兵士は40日行程して Qāmūl まで取り、敵をその幕営地(yūrt)から遠ざけた」[S 226a/6-10, P 136a/14-18] と、本処記事と矛盾するような記事が見える。Qāmūl は誤記か、或いは Čübei の諸子 Nom-qulī, Buyandaš らが肅州・沙州方面から達したと解するか、どちらかである。しかし、Kōnčeg の Qomul 在住は1314年には確実である。従来『站赤』6, 延祐元(1314)年閏3月6日に「寛徹言えらく、塔失の城に站を立つるは、去年、奏して準^{じゆん}されたり」、同7月に「是の月、中書省奏すらく、邇^{ちかごろ}者、議したるに、元と兪したる站戸を將^{もつ}て答失城に発遣して站到^{たつ}。数内に四枝(枝は集団、兵団の意。m. aimay か jigür の訳語)の滅吉憐の民の或いは阿八赤 abači・昔宝赤 sibayuci (阿八赤を人名と見て Abači の sibayuči とも読める)に属すると称し、因りて以て役を避くる者有り。諸王南忽里 Nom-qulī の来文に拠るに称すらく…」と1314年の前年1313年には遅くとも Kōnčeg および Nom-qulī が「塔失の城」「答失の城」を保有していたことが知られていた。同城は、『経世大典』地理図に哈密 Hami > Qomul の右隣に見える塔失八里 Taš-baliq に相違なく、明代の『畏兀児館訳語』の他失八里/Taš-baliq/石頭城[庄垣内:117]に当たり、かつ滅吉憐 Megrin~Begrin [Rašid は BKRYN. JTS 29a-29b] が近住する点、『明実録』に「野セ克力 wild-Megri」が分屯する「(他)失把力哈孫 Taš-balqasun」(balqasu(n) は t. baliq の蒙古語)[明代西域史料:494-5。他処もあり]と元・明時代一連の情況が窺知された。Qāmūl を明記する本書と情況を示す『站赤』との東西文献の一致により、Kōnčeg の遅くとも1313年からの Qomul 地区保有は確実である。本処記事による西面全体の形勢は、元側は Nom-qulī と Buyandaš が肅州・沙州に本拠を置き、前線は北から Bars-köl に Bularyi の güyügči を中核とする増強部隊、Qomul に Kōnčeg, タリム盆地南辺に Jatar が配置され、一方 Esen-buqa 側は Emil-hvāja が本軍で、Bularyi に対して(つまり Boydo-aḡula 北麓に、の意だろう) Qutuqu, Kōnčeg に対して(同様に Boydo-aḡula 南麓に、の意か) Sabgān-ztrak と Aḡmad, Jatar に対して Jankjul-baḡšī が前線にいる形である。要するに Uigūristan は、Qubilai 時代「(Qarā-ḡuju は) Uigūr たちの町であり、そこには佳きワイン(šarāb)があり、Qan と Qaidu の境域の間であって、両方に与し、双方の側に仕え

ている」[JTS 208a/26-27]、「Qān と Qaidu の間を境域とする Uigūristān 地方とその他の諸地方」[JTS 350/9-10] と Rašīd が明言するように、開戦までは、両属状態がつづいていたと見てよい¹⁹⁾。『集史』では同方面ではただ一度の会戦を除き実戦はなかったと述べ [JTS 211a/22-29]、既引の Čapar 追討戦でも Du'a と Nom-qulr が協同している。Ögödei 系追い落としは、Čayatai 同族である両派にとって共通の利益だったろう。結局、甘粛河西から天山以西まで、Čayatai 一族が横に連鎖し Čayatai 家の天地となったのだから。1314年以降の開戦でも、北面での激闘とは逆に実戦したかどうか疑わしい。Nom-qulr の父 Čübei の時代でも実は実戦を窺わせる記事は極めて少ない。元帝と Qaidu の強者の直接対決の傍で、やむをえず対立の姿勢を Du'a ・ Čübei の両派がとりつづけたのが真相であったのかもしれない。ただし、1314年の開戦の直接の結果として、1310年代の後半に、ウィグル・イディクト高昌王家が「兵を火州(Qara)Qočoに領し、復た畏兀兒城池を立つ」〈世勲碑〉という新情勢が生まれてくる。

おわりに

大きな政治推移の中で本処記事を眺めると、¹Darmabala の寡婦 Dagi とその両子 Qaišan ・ Ayurbarwada を忌避する成宗 Temür の后 Bulyan-qatun の強い要請による Qaišan 懷寧王受封と Altai 派遣および Dagi ・ Ayurbarwada 母子の懷孟就居（懷孟は Qubilai-Ĵingim-Darmabala と継承された Qubilai 家私領）、²Qaidu 死去による Du'a の講和主唱と元側への通応、³Du'a による Ögödei 系列の排斥と元軍との協同による Čapar 追討、⁴Du'a の即位、⁵1306年の Qaišan 軍による Irtiŝ 戦役と Melig-temür ・ Ögödei 諸派の投降、Čapar の Du'a への投降、⁶1307年初頭の成宗死去と夏の Du'a の死去、⁷Bulyan-qatun の要請による安西王 Ānanda の招致と、Melig-temür と組んだ Ānanda の大都宮廷制圧、⁸Dagi 母子の推立による大都首脳部の Ānanda 打倒、⁹Qaišan の Qara-qorum 集

19) 本書704/1304-05年、成宗との協約を果たした Du'a が大クリルタイを開いた時の言葉の中に「BYŠ BALQ / Biš-baliq の境域であり、我等が王国と ulus (mulk va ulus) の王領地 (hašša) である QRA ĤWJW / Qara-qojo」とある [S 150b/3, P 23b/8-9] からといって、Qara-qojo を Du'a 固有領となったと考える必要はないだろう。逆に本処記事では元側 = Čübei 一門側の立場で記すから Uigūristān は Čübei 一門が占有したように見える。事実は両属だろう。『集史』Temür 紀に大徳改元の頃(1297)、「QRA ĤWJH / Qarā-qūja の境域にいる Ānanda と Aĵiqi と JWBAY / Čübei」とあるのも軍事進駐の状態である [JTS 217b/5]。

会とその進撃,¹⁰Ayurbarwada の Qaišan への譲位(以上1307年),¹¹7~10の間の Du'a-ulus 内での混乱と Kōnčeg・Talīyu の即位と死去・打倒,¹²1310年の Esen-buqa 即位による Du'a-ulus の安定,¹³1311年 Qaišan の急死と Ayurbarwada の即位,¹⁴仁宗による北・西両面軍懐柔,¹⁵1314年東西開戦,¹⁶Ayurbarwada による Qaišan 遺子の追い出しと Qošila の Altai 地区への逃入,¹⁷おそらく Toyači の Qošila 推立による Altai—甘肅—陝西の騒乱,¹⁸仁宗の子 Šidibála 即位に対するモンゴル貴族の不満とその暗殺, 晋王 Yisüntemür の即位,¹⁹1328年 El-temür 以下の旧 Qaišan 系軍団のクー・デタと Qaišan 次子 Tuγ-temür の推立,²⁰Čayatai 軍の支援をうけた Qošila の進撃とその暗殺——という、ほぼ30年の激動のちょうどなかばにあたる。Altai 以西の情勢と大元ウルス中央政局とは密接に連動していた。『オルジェイト史』には、その手掛りとなる記事がかなり残り、良写本からの精査・検討を経ていない『ヴァッサーフ史』の当該記事とも彼此対校して確実な事実を剔出していく必要がある。今後の責めとしたい。

[追記] 先の大戦のさなか Istanbul より数々の貴重にして本源史料となるペルシア語文献古写本の写真・フィルムを日本に将来され、本年初頭にみまかられた小林高四郎氏には、遂に拝眉の機会に恵まれなかったが、昨年同地における筆者の調査への大きな機縁を結果として賜わった。氏の将来したものはいずれも重要なものばかりであり、そして当時は Istanbul 市内諸処に散って閲覧すら容易でなかったと推察される。氏の慧眼と情熱に対し、心よりの敬意と謝意を表し、御冥福をお祈りする。そして無力な筆者に全面援助を惜しまれなかった Dr. Adnan Erzi と小松久男御夫妻に深甚の謝意を表わす。

史料

Anonym?

Šu'ab-i Panjāna, MSS. Istanbul, Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, Ahmet 2937, 227 folios.
[Šu'ab]

Ḥāfiẓ-i Abrū, & Anonym.

Mu'izz al-Ansāb, MSS. Paris, Bibliothèque Nationale, Ancien fond persan 67. [Mu'izz P];
London, British Library, Or. 467. [Mu'izz L]

Juvainī, 'Alā al Dīn 'Atā-Malik

Ta'riḥ-i Jahān-Guša, Mīrzā Muḥammad Qazwīnī ed., *The Ta'riḥ-i Jahān-Gushā of 'Alā' u'd-Dīn 'Atā Malik-i-Juwaynī*, 3 vols, Gibb Memorial Series, XVI/1, 2, 3, Leyden and London, 1912,

1916, 1937. [*Qazvīnī*]

Qasānī, ‘Abd-Allah b. Muḥammad al-

Ta’rīḥ-i ‘Uljāitū, MSS. Istanbul, Aya-Sofya Cami, Kütüphanesi, 3019/3, folio 135-240. [S]; Paris, Bibliothèque Nationale, MSS. Supplément persan 1419, 164 folios. [P]

Rašīd al-Dīn, Fazl-Allah Hamadānī.

Jamī‘ al-Tavārīḥ, MSS. İstanbul, Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, Revan 1518. [JTS]; London, British Library, Or. Add. 16688. [JTLa]; British Library, Or. Add. 7628. [JTL]; Paris, Bibliothèque Nationale, 254 (Supplément 1113) [JTP]; Tehran, Kitabhāne-i Majlis-i Šurāi millī, 2131. [JTTm]

Šamī, Nizām al-Dīn.

Zafar-nāma, F. Tauer ed., *Histoire des conquêtes de Tamerlan intitulée Zafarnāma*, I, Praha, 1937. [Tauer]

Vassāf, Šihāb al-Dīn ‘Abd-Allah Šaraf Širāzi.

Tazjīyat al-Amšār va Tazjīyat al-A‘šār, facsimiles from 1853 Bombay Text, *Ta’rīḥ-i Vassāf al-Hazrat dar Ahvāl-i Salāṭīn-i Muḡul*, Tehran, A.H. 1338. [Vassāf]

Yazdī, Šaraf al-Dīn ‘Alī.

Zafar-nāma, facsimile Texts, ed A. Urunbayev, Taškent, 1973. [Yazdī]

虞集

〈句容郡王世績碑〉, 『道園学古録』四部叢刊所収至正元年刊本23/7a-15a。『道園類稿』元人文集珍本叢刊所収至正五年刊本38/1a-15b。蘇天爵『元文類』四部叢刊本26/7a-18b。[世績碑]

閻復

〈枢密句容武毅王紀績碑〉, 蘇天爵『元朝名臣事略』台湾国立中央図書館蔵元統刊本3-3, 3/5b-9a。繆荃孫輯校『藕香零拾』所収『静軒集』3/17a-20a 〈枢密句容武毅王碑〉は前者より引用。[紀績碑]

虞集

〈高昌王世勲碑〉, 『道園学古録』24/6a-10a。『道園類稿』39/1a-7b。『元文類』26/1a-7a。張維『隴右金石記』5/58b-63a。黃文弼「亦都護高昌王世勲碑復原并校記」『文物』1964-2, 34-42。党寿山「亦都護高昌王世勲碑考」『考古与文物』1983-1, 96-100。耿世民「回鶻文亦都護高昌王世勲碑研究」『考古学報』1980-3, 515-529, Geng Shimin et James Hamilton, L’Inscription ouïgoure de la Stèle commémorative des Iduq Qut de Qoço, *Turcica* 13, 1981, 10-54。卡哈尔·巴拉提, 劉迎勝「亦都護高昌王世勲碑回鶻文碑文之校勘与研究」『元史及北方民族史研究集刊』8, 1984, 57-106。[世勲碑]

* これ以外の漢文文献は省略する。

先行研究

Allsen, T.

The Yüan Dynasty and the Uighurs of Turfan in the 13th Century, *China among Equals*, Univ. of California Press, 1983, 243-280, especially 259.

Бартольд, В.В.

Очерк истории Семиречья, Сочинения, Т. II -1, Москва, 1963. V., T. Minorsky tr., History of the Semirechyé, *Four Studies on the History of Central Asia I*, Leiden, 1956, 73-165.

D'Ohsson, C.M.

Histoire des Mongols, Amsterdam, 1852, T. IV, 556-558. 佐口透訳『モンゴル帝国史』6, 平凡社東洋文庫, 1979, 229-231, 235-236.

Grousset, R.

The Empire of the Steppes, tr. Walford, N., New Brunswick, 1970, 340.

Hammer-Purgstall, J. von

Geschichte der Ilchane, II, Darmstadt, 1843, 231-232.

加藤和秀

ケベクとヤサウル——チャガタイ・ハン国支配体制の確立, 『東洋史研究』40-4, 58-84, 特に68.

劉迎勝

皇慶, 至治年間元朝与察合台汗国和戦始末, 『国際元史学術討論会論文提要』, 南京, 1986, 193-195.

Oliver, E.E.

The Chaghatai Mughals, *JRAS*, 20-1, 1888, 72-128, especially 105-106.

Spuler, G.

Die Mongolen in Iran, Leipzig, 1939, 114-115.

植村清二

察合台汗国の興亡(三), 『蒙古』8-12, 1941, 63-74, 特に66-67.

Vámbéry, A.

Geschichte Bochara's, Pesth, 1872, 171.

参考文献

Benedetto, L.F.

Marco Polo, Il Millione, Firenze, 1928. [Benedetto]

Blochet, E.

Djami el-Tévarikh, Histoire générale du monde par Fadl Allah Rashid ed-Din, tome II, Leiden —

- London, 1911. [Blochet]
- Boyle, J.A.
The History of the World-Conqueror by 'Ala-ad-Din 'Ata-Malik Juvaini, 2 vols, Manchester, 1958. [Boyle¹]
The Successors of Genghis Khan, New York, 1971. [Boyle²]
- Buell, P.D.
 Sino-khitan administration in Mongol Bukhara, *Journal of Asian History*, 13-2, 1979, 121-151.
- Cleaves, F.W.
 1949 The Mongolian names and terms in *the History of the Nation of the Archers* by Grigor of Akanc', *HJAS*, 12-3·4, 400-443.
 1951 The Sino-Mongolian inscription of 1338 in memory of Ĵigūntei, *HJAS*, 14-1·2, 1-104, 32pl.
 1956 The biography of Bayan of the Bārin in the *Yüan Shih*, *HJAS*, 19, 185-303.
 1982 *The Secret History of the Mongols*, 1, Harvard Univ Press.
- Demaisons, P.I.
Histoire des Mongols et des Tartares par Aboul-Ghāzi Bēhādour Khān, Amsterdam, 1970. [Demaisons]
- Doerfer, G.
Türkische und Mongolische Elemente im Neupersischen, I ~ IV, Wiesbaden, 1963, 1965, 1967, 1975.
- Fanke, H.
 Ein Weiteres Mongolisches Reisebegleitschreiben aus Čayatai (14.Jh.), *Zentralasiatische Studien* 2, 1968, 7-14.
- 耿世民
 回鶻文《大元肅州路也可達魯花赤世襲之碑》訳积, 『向達先生紀念論文集』, 新疆人民出版社, 1986, 440-454。
- 耿世民・張宝璽
 元回鶻文《重修文殊寺碑》初积, 『考古学報』1986-2, 253-264, 2pl.
- Haensch, E.
Mongolica der Berliner Turfan-Sammlung. Part 2 : Mongolische Texte der Berliner Turfansammlung in Faksimile, Berlin, 1959.
- Hambis, L.
Le chapitre CⅧ du Yuan che : les généalogies impériales mongoles dans l'histoire officielle de la dynastie mongole, Leiden 1945. [Chapitre CⅧ]
- Hammer-Purgstall, J. von

Geschichte Wassäfs, Persisch herausgegeben und Deutsch übersetzt, 1, Wien, 1856. [Hammer-Purgstall]

本田實信

1976 イルハンの冬营地・夏营地, 『東洋史研究』34-4, 81-108.

1982 モンゴルの遊牧的官制, 『小野勝年博士頌寿記念東方学論集』, 京都, 359-375.

加藤和秀

チャガタイ・ハン国の成立, 『足利惇氏博士喜寿記念オリエント学・インド学論集』, 東京, 1978, 143-160.

Kara, G.

Petites inscriptions ouigours de Touen-houang, Hungaro-Turcica, Budapest, 1976, 55-59.

Kotwicz, W.

Quelques données nouvelles sur les relations entre les Mongols et les Ouigours, *Rocznik Orientalistyczny* II, Lwów, 1925, 240-247.

Lessing, F.D.

Mongolian-English Dictionary, Bloomington, 1973.

Ligeti, L.

Monuments Préclassiques 1, Budapest, 1972.

Monuments en Écriture Phags-pa: Pièces de chancellerie en transcription chinoise, Budapest, 1972.

劉迎勝

1984 阿里不哥之乱与察合台汗国の発展, 『新疆大学学报・哲学社会科学版』1984-2, 29-37.

1985 至元初年の察合台汗国, 『元史及北方民族史研究集刊』9, 1985, 45-56.

Maitra, K.M.

A Persian Embassy to China, New York, 1970.

Martinez, A.P.

Gardīzī's Two Chapters on the Turks, *Archivum Eurasiae Medii Aevi*, II, 1983, 109-217.

Minorsky, V.T.

Hudud al-'Ālam, London, 1937.

森安孝夫

1983 元代ウイグル仏教徒の一書簡—敦煌出土ウイグル語文献補遺一, 『内陸アジア・西アジアの社会と文化』, 1983, 209-231.

1987 中央アジア史の中のチベット——吐蕃の世界史的位付けに向けての展望, 北村甫教授退官記念論文集『チベットの言語と文化』, 冬樹社.

Mostaert, A & Cleaves, F.W.

Les lettres de 1289 et 1305 des Ilkhan Aryun et Öljētū à Philippe le Bel, Harvard Univ. Press, 1962.

[*Lettres*]

小沢重男

『元朝秘史全訳』下, 東京, 風間書房, 1986. [小沢下]

Pelliot, P.

1913 Sur quelques mots d'Asie Centrale attestés dans les textes chinois, *JA*, 11-1, 451-469.

1920 *Les Grottes de Touen-Houang*, I, Paris. [*PTH*]

1930 Notes sur le "Turkestan" de M.W. Bartold, *TP* 27, 12-56.

1949 Un rescrit mongol en écriture 'Phags-pa, Tucci, G., *Tibetan Painted Scrolls*, II, 621-624.

Polo Notes on Marco Polo, I - III, Paris, 1959, 1963, 1973.

Pelliot, P. et Hambis, L.

Histoire des campagnes de Gengis Khan, I, Leiden, 1951. [*Pelliot et Hambis*]

Serruys, H.

The Office of Tayisi in Mongolia in the fifteenth Century, *HJAS*, 27, 353-380.

庄垣内正弘

『畏兀兒館訳語』の研究—明代ウイグル口語の再構—, 神戸市外国語大学『内陸アジア言語の研究』I, 1983.

杉山正明

1982 鹵王チュベイとその系譜, 『史林』65-1, 1-40.

1983 ふたつのチャガタイ家, 京大人文研共同研究班報告『明清時代の政治と社会』, 651-700.

Yule, H.

Yule¹ *Cathay and the way thither*, I - IV, London, 1915, 1913, 1914, 1916.

Yule² *The Book of Ser Marco Polo*, I · II, London, 1921.